第４回伊賀市夢のある農業振興計画策定委員会会議録

１．開 催 日　令和８年３月27日（金）
２．場　　所　本庁舎５階　501会議室
３．出 席 者　野中章久、森下光子、泉川道子、行方典子、川瀬成清、南友照、前川良文、松裏充彦、村山邦彦、福地和幸、株式会社フジヤマ（技術者５名）
４．欠 席 者　中林有美、松森芳子、吉田具示、中浦順一郎、桃木弘美、中井奈緒美、唐澤寿江
５．事 務 局　堀川産業農林部長、福山産業農林部理事、吉福農林振興課長、藤森農林振興課主幹（計画担当）、半田農林振興課振興係長、岡森農林振興課鳥獣害対策係長、大谷農林振興課計画係員
６．案　　件　１．伊賀市の農業及び農村の現状調査、分析の結果報告
　　２．伊賀市夢のある農業振興計画（案）
　　３．タウンミーティングの日程及び内容等
　　４．　その他
７．会議の次第　　（午後２時01分　開催）

（野中章久委員長）

定刻を少し過ぎましたが、第４回伊賀市夢のある農業振興計画策定委員会を始めさせていただきたいと思います。

出席委員数は10名で、委員の過半数の出席をいただいております。伊賀市夢のある農業振興計画策定委員会設置要綱第６条２項に基づき、会議は成立しております。

なお、本会議は、伊賀市審議会等の会議の公開に関する要綱第３条によって公開ということになっていますので、会議の傍聴を認めております。報道関係の撮影等についてもご了解いただきたいというふうにお願いしますのでよろしくお願いします。

また、会議の内容は録音し、発言内容に沿って議事録を作成及び公開させていただきますので、ご了解をよろしくお願いします。

では、事項に入る前に本日の配付資料について、確認させていただきます。事項書、資料①から④、参考資料、今後のスケジュールということになっています。

データ送付済みのものもあると思います。今後のスケジュールについては、時点修正したものが入っております。紙の資料については、机の上に配布しております。ご確認ください。なければ、言っていただければ事務局の方で手配します。

それでは、お手元の事項に従って進めさせていただきます。

皆様お忙しい中いらっしゃってるので、ちょっと時間の限りもありますので、効率的な議事進行にご協力お願いしたいと思います。

それでは事項書に従って、第１項、伊賀市の農業及び農村の現状調査、分析の結果報告

を議題とします。

事務局から説明お願いします。

(藤森農林振興課主幹（計画担当))

失礼いたします。

伊賀市の農業振興を図るための基本的な方針や施策を定める伊賀市夢のある農業振興計画の策定にあたっては、伊賀市の農業及び農村の現状調査、分析が必須であり、現状調査の一つとして、令和８年１月から２月にかけて、農業者や農業関係団体など合計 10 か所へのヒアリングを実施しました。

また、伊賀市で農業に従事されている農業者が、農業生産活動する上で感じる課題及び農村地域で生活する上で感じる課題を把握し、「伊賀市夢のある農業振興計画」の基本方針や主要施策及び事業を検討する際の基礎資料とするため、伊賀市内の農地の耕作者 1,000 件を対象としたアンケート調査を実施しました。

令和７年７月及び８月には、パネル展示や対面での説明などによる情報提供と、アンケートや聞き取りによる意見聴取を行うオープンハウス型説明会を３日間開催し、消費者の方など多様な立場の方と対面でお話しさせていただき、伊賀市の現状把握に努めてきたところです。

令和８年１月 16 日に開催した第３回委員会において、現状調査及び分析の中間報告を行ったところでございますが、本日は、伊賀市夢のある農業振興計画策定委員会設置要綱第７条「委員長は、必要があると認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求め、その説明又は意見を聴くことができる。」との規定に基づき、計画策定を支援いただいている株式会社フジヤマ様にご出席いただいておりますので、フジヤマ様より、現状調査及び分析の結果を報告いただきます。

その後、当該報告及び説明内容について、委員の皆様からご意見等を頂戴したいと存じます。

説明は以上でございます。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。

この件、フジヤマ様の出席と、これから説明に入るという案件に関して、質問とか異議とかご意見とかございませんでしょうか。

これは委嘱していることなので、異議なしとして認めてよろしいですかね。はい。

それでは、フジヤマ様、説明の方お願いします。

(株式会社フジヤマ)

はい。それでは、現状分析・調査の結果報告をご報告させていただきます。

資料①をご覧ください。まず、統計情報から、伊賀市の現状を整理いたしました。

１ページ目ご覧ください。まず社会経済状況の動向ということで、１ページ目は伊賀市の総人口の整理をしております。

続いて、２ページ目ご覧ください。２ページ目が、産業別就業人口で、続いて３ページ目、産業別生産額の整理をしております。

こちらにつきましては、前回の委員会でご報告した通りですので、詳細は省略させていただきます。

続きまして４ページお願いします。４ページ目以降に、農業情勢の動向を整理しております。

まず２－１．農業者・担い手の動向ということで、４ページ目は農家数を整理しております。

上段は、前回の委員会の通りですけれども、下段のグラフですね、販売農家の内訳を主副業別に見ますと、グラフのオレンジ色の部分です。副業的農家が大半を占めることがわかります。この副業的農家といいますのは、大体 65 歳以上の販売農家ということになりますので、伊賀市における農家の高齢化が進んでいることがわかります。

５ページ目をお願いします。こちらにつきましては農業経営体を、個人経営体なのか法人経営体なのか、その組織別の経営体数を整理したものです。

６ページ目お願いします。こちらが基幹的農業従事者数、先ほどの農家や農業経営体というのは、世帯単位の形だったんですけれども、こちらは人単位のものです。

５ページ、６ページも、前回の委員会で説明した通りですので、詳細は省略させていただきます。

７ページ目、お願いいたします。７ページ目の上、認定農業者数の推移を整理しました。伊賀市における認定農業者数は、直近 10 年では微減傾向にありますが、その内訳を見ますと、法人経営体については増加しております。下段は、新規就農者数の直近 10 年の整理をしております。伊賀市における令和５年の新規就農者数 28 人で、三重県全体の約 16%を占めています。推移については、数年ごとに増減はあるものの減少傾向にありまして、この原因としては、やはり農業参入のハードルの高さが考えられます。

８ページ目、お願いします。続いて、農地の動向を整理いたしました。

８ページ目は、経営耕地面積を整理しております。こちらも前回の委員会で説明いたしましたが、伊賀市では水稲作が基幹作物ということで、田んぼの占める割合が高くなっております。

９ページ目お願いします。農業経営体を経営耕地面積の規模別に整理いたしました。

前回は、これを割合で整理しておりましたが、今回は、実数で整理しました。

９ページの上側のグラフを見ていただきますと、経営耕地面積の規模が小さい農業経営体の方が、直近 10 年での減少率が高いことがわかります。

続きまして 10 ページお願いします。担い手への農地の集積面積を整理いたしました。

前回は集積率だけの整理でしたが、今回は集積面積の実数につきましても情報調査いたしました。

上のグラフが集積面積の推移、下のグラフが集積率の推移でして、いずれも直近 10 年

で増加傾向にありますが、令和元年からの直近の５年を見てみると、伸び率が集積面積、集積率ともに微増にとどまっております。これは、担い手１経営体が管理できる農地面積には限りがあることや、中山間地域など条件不利地では農地集積が難しいことなどが背景にあると考えられます。

続きまして 11 ページお願いします。農地の転用面積を整理いたしました。

上のグラフが転用面積の推移で、下のグラフが伊賀市全体の耕地面積に対する転用率の推移です。こちらも年ごとに増減ありますが、転用率を見ますと、伊賀市の農地の転用率については、三重県全体の転用率よりも平均的には低い値で抑えられているかということがわかります。

続きまして 12 ページをお願いします。12 ページは荒廃農地の割合を示したグラフです。伊賀市全体の耕地面積に対する荒廃農地の割合でして、年々増加傾向にあることがわかるかと思います。ただ、この調査については、年ごとに調査範囲などが変わってきたりして、精度が高い数字ではないので、あくまでも参考値としてとらえてください。

続いて 13 ページお願いします。農業生産の動向を整理いたしました。

13 ページは、まず農業産出額を整理しております。上のグラフ見ていただきますと、伊賀市における直近５年の農業産出額は増加傾向にあります。一番下の表を見ていただくと、作物の種類ごとにですね、直近５年で増加してるのか減少しているのかというのはそれぞれあるんですけれども、全体で見ると、農業産出額は増加しておりまして、この原因としましては、農産物の価格の上昇というのが大きな要因かと考えております。

14 ページお願いします。14 ページは農業経営体の数を、農産物の販売金額の規模別で整理いたしました。こちらにつきましても、上側のグラフ見ていただくとわかる通り、販売規模が小さい規模経営体の方が減少率が大きくなっておりまして、小規模経営体の方が物価高騰ですとか農業機械の更新ですとか、そういった影響を大きく受けるために離農が加速しているものと考えております。

続きまして 15 ページお願いします。鳥獣被害額の整理です。こちらも年ごとに増減ありますが、直近５年では、伊賀市の鳥獣被害額は増加傾向にあります。

やはり、中山間地域に位置する農地が市内で多いことですとか、農家の高齢化や離農に伴って農地や里山管理の地域活動が縮小していることなどが、被害額増加の背景として考えております。

続いて 16 ページをお願いします。前回委員会の中でご指摘いただきました流通のことについても、調査できる範囲で調査いたしました。

まず 16 ページにつきましては、農産物の出荷先別の農業経営体数を整理いたしました。上側のグラフを見るとわかる通り、ほとんどの出荷先が農協になっておりますが、平成 22 年から令和２年の 10 年間の推移を見ますと、一番右側の赤い部分ですね、その他の割合が大きくなっておりますので、販売形態が多様化していることがわかります。

続いて 17 ページお願いいたします。農業経営体の事業種別の経営体数の割合を整理し

ております。

一番大きな割合である水色のものが、消費者に販売しているという経営体なんですけれども、これが大半を占めるんですが、一番下の青い帯ですね、こちらが農産物の加工をしている農業経営体の割合なんですけれども、平成 22 年からの 10 年を見ますと、およそ倍、45 経営体から 88 経営体へと倍に増えております。

資料①については説明以上になります。

続きまして、資料②をお願いいたします。アンケート調査を行いましたのでその結果のご報告をいたします。

まず１ページ目お願いします。調査目的としましては、本計画を策定するにあたっての基礎調査として、アンケート調査を行いました。

調査対象者は、伊賀市在住の伊賀市にある農地の耕作者としまして、調査数は、このうち営農条件ですとか、年齢階層に偏りがないよう抽出した 1000 件といたしました。

調査方法は、アンケートを郵送して回答いただくという形をとりました。

調査期間は、令和７年 12 月 15 日から令和８年１月 16 日までの１ヶ月で、調査期間終了後に届いた回答も含めて、今回集計しました。

回収数は、466 件、回収率にすると、46.6％で、十分な回収率じゃないかと考えております。

続いて２ページお願いします。調査結果になります。

まず１つ目が、回答者の年齢です。

右側のグラフを見ていただくとわかる通り、60 歳代以上が大半を占めており、農業者の高齢化がうかがえます。

下の生産している作物のうち、販売金額が最も多いものは何ですかという質問に対しては、お米と回答した方が 59％で最も多かったです。

また、その他と回答した方も 23％いましたが、その内訳を見ると、販売なしや自家消費といった回答が多くを占めました。

続いて３ページお願いします。所得構成についての質問になります。

最も多かったのが、農業所得と年金（年金の方が多い）という回答が最も多く、64％を占めました。このことからも、農業者の高齢化がわかります。

続いて、農業の後継者はいますかという質問に対しては、農業を継がせるつもりがないという回答が最も多く、次いで、家族の中に後継者がいるという回答が２番目に多い結果になりました。

今の結果については回答者の属性に関する回答なんですけれども、それ以外の回答結果に関しては、資料③で後程ご説明します。

続いて４ページお願いします。自由意見をまとめたものになります。

まず一番上の段ですね、将来残したいと考える伊賀市の農村地域の魅力は何ですかという質問に対しては、その回答内容から抽出したキーワードを見ると、自然・風景という

回答が最も多い結果になりました。

続いて下、農業・農村施策についてご意見・ご希望ありますかという質問に対しては、回答内容から抽出したキーワード見ますと、高齢化してるから農業が大変といったような高齢化に関する不満が最も多く 35 件、次いで、農地の維持管理に関することが 24 件と続いております。

資料②については以上になります。

続きまして、資料③の計画書案の中にも、今回の現状分析の結果を整理しましたので、資料③を用いて説明させていただきます。

資料③の中ほど、21 ページをお願いいたします。ここで、アンケート調査につきましても、この計画書の中に整理しておりますのでこちらを用いて説明します。

21 ページは、あなたが農業を続けていく上での問題は何ですかという質問に対しては、高齢化や営農意欲の減退により農作業が困難と回答された方が 271 件で最も多く、次いで、老朽化した農業機械の更新が困難、老朽化した農業施設の更新が困難、機械の更新が困難、あとは肥料、農薬、燃料などが高騰しているといった回答が続きました。

続きまして 22 ページお願いします。

あなたのほ場の生産基盤における問題は何ですかという質問に対しまして、かんがい用水が足りないといった回答ですとか、ほ場の水はけが悪いといった回答が多い状況でした。

続いて、農地や農業施設を維持管理する上での問題は何ですかという質問に対しましては、農地法面などの草刈という回答が最も多く、次いで獣害防止柵の設置や修繕などが続きました。

続いて 23 ページお願いいたします。

将来、次の世代の担い手が農地を継承してくれるために必要なことは何ですかという質問に対しましては、こちらについても、農地法面などの草刈、水路の泥上げなどの労力の軽減といった回答が最も多く、次いで、農業機械の取得更新や農業施設の整備に関する負担の軽減といった回答が多い状況でした。

23 ページ下の段、現在の場所で生活を続ける上で、また、伊賀市で暮らしたいと思う人を増やす上での課題は何ですかという質問に対しては、医療福祉という回答が最も多く、次いで、地域コミュニティの維持や買い物環境といった課題を挙げた回答が多かったです。

24 ページお願いします。

最後に、あなたが重視する、また望む伊賀市の農業の施策は何ですかという質問に対しましては、鳥獣害対策という回答が最も多く、続いて、生産者の農業経営所得安定化への取り組みなどが多い回答になっております。

続きまして、資料③の 25 ページをお願いします。

現状調査では、アンケートの他に、市内の農業関連団体へのヒアリング調査も実施いた

しました。調査結果を、こちら25ページから27ページの表に取りまとめております。

かいつまんで説明いたしますと、まず、ヒアリング結果のうち農家に関するご意見の中では、新規就農する際には農地の確保が難しいですとか、あとは、新規就農するときに補助金などのメニューを教えてくれる人とか、そういう相談・指導してくれる人が必要というご意見がありました。

また、農業に特化した求人サイトで雇用労働者を募集しているというご意見もございました。

あと、担い手に関しましては、国が設定する担い手のみならず、小規模農家含めた農業者全体に向けた取り組みが必要だというご意見が多くありました。

この25ページ表の下段、農業生産に関しましては、農作業受託についてはマッチングアプリを活用して日雇いなどのアルバイトを募集しているというご意見がありました。

また、農地の管理について、高齢化ですとか離農ですとか、土地持ち非農家や新規移住者の増加の影響で、農地の維持に係る共同活動、いわゆる出合いの参加者が減少しており、そういった農地の維持管理が課題というご意見が多かったです。

続きまして26ページをお願いします。

中山間地域に関する課題として、やはり中山間地域と平場では、農業にかかる労力経費が中山間地域の方が非常に大きく、そういったことも含めて、中山間地域での農業が難しいというご意見がありました。

あと、スマート農業については、こちらも中山間地域では、自動操舵とかそういったものに必要な位置情報を得ることが、木の陰になったりとかで難しいことがあるので、データの活用に重きを置いたスマート農業の展開が望ましいのではないかというご意見がありました。

また、農業経費については、農業用施設ですとか農業機械の更新にかかる投資が非常に大きくて、農業参入のハードルにもなっているというご意見ありました。

また、肥料の価格などが高騰しているというご意見が多かったです。

また、耕畜連携ですとか環境負荷につきましては、伊賀市ではすでにいろんな協議がなされており、こういった取り組みが進んでいるので、より一層連携強化、アピールできればというご意見がありました。

鳥獣被害に関しましては、やはり鳥獣被害が深刻でして、また捕獲した獣の止め刺しが重労働あるというご意見がありました。

27ページお願いします。

農産物加工については、中山間地域で農業の収益を伸ばすためには、農産物の付加価値の向上が有効であるというご意見がございました。

また、流通・販売に関しましては、伊賀米のコシヒカリは伊賀市内ではなく、市外、県外からの購入者も多いという、ご意見がありました。

有機農業に関しては、生産者と消費者の信頼関係が現在で構築されておりますので、こ

ういったストーリーが見えるようなブランディングが望ましいというご意見がありました。

また、商品に関しましては、地産地消や農産物の適正価格での購入に向けて、消費者の意識の改革も必要であり、そのためには、消費者と生産者の交流も必要というご意見ありました。

また、販路の拡大については、伊賀の食をアピールできるチャンスですので、旅行者向けなどにそういった伊賀の食のおいしさをアピールできるといいというご意見ですとか、あと需要が多様化していまして、カット野菜とかそういったものも需要が高いというご意見がありました。

また、農村環境については、移住促進のために、空き家や住宅補助への支援が望ましいんじゃないかというご意見ありました。

現状分析についてのご報告は以上になります。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。それでは、これに関してですね、質疑っていうか、皆様のそれぞれの、何て言いますかね、お立場っていうか生産というか取り組みの中から、そうですねとか、いやこれこういうことだからこういう数字になってんじゃないっていうのを、ちょっと出していただきたいなと思います。

アンケートって、大体数字で出るんですけど、その後ろ側にある構造ってああじゃないこうじゃないってみんなで語ることによってですね、みんなで何か認識が深まるというところがあるので、そうしないと何か単に数字が出ましたって形になっちゃって、後ろの計画策定の方にですね、有効な施策をつくる上ではですね、やっぱりどうしても認識深めたほうがより良い政策になるので、ぜひそれぞれ、ご意見をいただきたいというふうに思います。

なんかもう、これ以外は皆さんにご意見いただきたいなと思います。

最初に僕口火切りますけど、質問じゃなくてね、意見っていうか、ちょっとフジヤマさんを含めて気が付いて欲しい部分なんですけど、日本農業、高齢化してるってのは定番の切り口なんですけど。これ見ると、回答者 70 代ですよね。これ、今までずっとね、農業って高齢化してますよねって言われてたときって、昭和一桁なんですよ。昭和一桁の人たちって本当にガチで、農業がんがんやってたんですよね。生まれて、もう何の疑念もなくっていうか当たり前のように、親父が農家かやってんだけど俺も農家だよねっていうのが昭和一桁なんですよ。

それに対して今 70 代ってこと。多分戦後生まれですよね。団塊の世代の次じゃないかなと思うんですよね。ということは、この地域はすごく、名阪国道ができたのが 50 年代じゃないですか。それから工業団地化が進んで、名古屋も大阪も 1 時間ぐらいでいけるようになると、いろんな会社が来ると。いう状況が 1957 年とすると、ちょうどもうその人たち大体高卒とかですね、就職しようかなあっちゅうことを、の時期なんですよ。

そうするとね、高齢化してるんだけど、それ昭和一桁のときの今、疑念なく家の農業はやるけどさっていう人を、だからこの世代なくなっちゃうとどうなるのかなっていうのの次の段階までは来てるんですよ。継いでくれてるんですよね。

そこのところが結構ね、多分リタイアして継いでるんですね。

その先で、次の世代に渡すのはどうかなって躊躇があるっていうアンケート結果なので、ここのところをどう見るかっていうか理解するってのは重要なところだというふうに思います。少なくとも、今の高齢者と言われてる人たちは、少なくとも勤めに出てそれでリタイアして、それで農業に帰ってきてる。だから、兼業農家ってカテゴリじゃなくて収入聞いたら、70 の人が多いんだから当然、一番多いのは年金と農業だよって言ってるっていう。要するに、年金農業なってるっていうのは、逆に言うとそういうふうな実像が必ずあると思うんですよね。

で、いやうちの親父違うぞとか俺違うぞっていうのがあれば、そういうことを言い合うと大分実情、像がはっきりしてくるので、それぞれぜひご意見をいただきたいと思います。

どなたからでも、今日は、逆に効率よくねみたいなこと言ってましたけど、そろそろきっちり議論しないといけない段階なので、皆さんに聞いちゃいますよね。

はい、どうぞ。

（福地和幸委員）

失礼します。米生産農家、子供と２人でやっておるんですけれども、およそ 10 ヘクタール。人にお話をすると、お前はこだわり過ぎてるんじゃないかというふうな生産の仕方をしてるというふうには言われるんですが、今報告をいただいておる多くの内容、データにつきましては、それを否定する発言という意味ではないんですが、私なりの考えとしてちょっとお伺いしたい、或いはお聞きしたいっていうふうなことがございまして。

まずこの多くの中で、今、くしくも委員長言われたような年金農業者みたいな、だから 70 歳ぐらいの方が多いよっていうのはまさしくそれで、その裏にはですね、若者が農業に対して入ってきてないっていう現状が見えるのではないかというふうに考えます。

今、たちまちの問題として私が懸念しておるのは、後継者をどのようにして確保するか。後継者を確保することによって、後継者を確保するということは、若者がですね、農業に対しての魅力を感じるところがあるというふうに考えております。

当然、農業に対する魅力を若者たちが受けるためには、私たち生産者そのものがボトムアップを図る。自助努力、或いは行政、ＪＡさんとタイアップしながら、多くの諸問題に向かうという姿勢を示していくという必要が、もう今、たちまち遅いかもわかりませんが、時代としては来ているのではないかなというふうに考えております。

また、このことをすることによって、もしかすると、今、たちまちもうすでにされてる生産者もお見えかと思うんですが、自分が作ったものをセールスアピールができる、或いはブランディングをしてですね、もっともっとプッシュできる農業に持っていくことができるようなことを見せることによって、若者たちから振り向かれるような農業に変革

していける可能性が強いんではないかというふうに私は考えております。

私は幸い息子 50 前で２人でやっておるわけなんですけれども、いろんなデータを見せていただきながら、しかしながら、私が倒れたときに子供１人でできる面積ではないというふうに考えておりますから、当然、私の地区であったり、私の個人、家の問題としても、やはり後継者という考え方を十分に理解しながら、確保するということはもう必須やというふうに考えてます。

ただ、そのやり方についてはいろいろあって、新規就農者の補助というのが３年から５年に延びたんですかね、ちょっと私不案内で、嘘言ってるかもわからないんですが、もしそういうふうな制度を活用するならば、伊賀市としてですね独自の、もう少し魅力あるプラスアルファがあっても、それが行政としてのボトムアップのために対する手助けであるんだ、あるのかなというふうな感じもしております。

たくさんの気持ちがあって、入りまじってですね、なかなか話を１から 10 までさせていただくと時間がなくなりますのでこのぐらいにはしますが、ただ、大切なのは、今冒頭申し上げましたように、若者が農業に対して振り向いて、そしてこれから先の自分たちが担っていくべき農業をどういうふうに考えていくのか、どういうふうに絵を描くかというふうなことの重要性っていうのを、やはりこの内容、せっかく未来を考える委員会ですので、そろそろ、今言われたように的を絞っていくというふうな方向性を、共通の認識として持っていくのが大事ではないのかなというふうに考えております。

私自身がここに参加をさせていただいた経緯はともかくといたしまして、私はそれぞれの皆さんが、手のひらをグーからパーに開けたような状態ではない。もう少し言うと、これ具体的に自分たちの分野のことを、こうですこうですっていうことをのみ話をしてますと、扇子を広げたようにですね、だんだんだんだんお互い離れていってしまって、それを横断的に橋渡しできるようなまとめ方がより難しくなるんではないかなということは、この委員会としての私の懸念の１つでございます。

したがいまして、委員長も言われましたように、そろそろ的を絞ってですね、いくということの必要性も私も従前から考えて感じておりましたし、今のタイミングでその方向性を皆さんが考えられる、ともに考えるということで、これから先ですね、私たち生産者が自助努力をすることによって、第２、第３、第６の関係される皆様方がですね、あいつあんな魅力あることしてるんか、ちょっといっぺんうちで取り扱ってみようかとか、或いはあそこいっぺんちょっと見にいかせてもらおうか、誰か連れてっていうふうなことに繋がっていけば、商業であったり観光であったりという分野に対しても繋がっていけるのかな、広がっていけるのかな。

要するに、策定委員会がですね、今回持たれてることによって、これだけのいろんな分野の方がお集まりいただいてるということにつきましては、まさしくリンクする必要がある。要するに、共に手を取り合って、将来像を見つめる計画するっていうふうなことをの根本論なんだと私は考えておりますので、そういった部分で、皆様方も、まずは農業生

産者確保についての意見をいただいたりとか、私達、自分たち生産者そのものがですね、おんぶにだっこで人に任すというそのようなやり方をしては全く発展もないし、それこそ疲弊していくばかりだというふうに感じておりますので、ぜひ、私の考え方としてはそのようなことが、これから先、最終回に向かって、委員会を進めていくというふうなことについては、私なりの考え方として、そのような方向性を、皆さんがご理解いただけるんで、私が偉そうに言うことはないんですけれども、そういうふうな方向が、皆さんとともに見い出せてですね、協議或いは意見の交換をできるのであれば、もっともっとスキルの上がった、モチベーションも私達も上げることも可能だと考えております。ぜひそういうふうな方法をお考えいただいたらなというふうに、私の私見でございますが、申し上げたいと思いますので、よろしくお願いをいたします。

以上です。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。品目が多様ですからね、それぞれ実は品目ごとに作戦もある場合もあるので、そこは今日の、これから議論するところの計画の方でですね、ある程度のこういう方向の作戦があるんじゃないかって、そこが本丸ですから。認識が、これで大体、間違ってないねっていうところ立脚していけば、いい方向にあるんじゃないかなというふうに思います。

特に収益性の高い、要するにビジネスとして展開する領域も重要なんですけども、そこの後継者が何かこないねっていうのもちょっと不思議なっていうか、そこも重大な問題なんですが、やっぱりこの報告にあるように、過半数は小さい農家で、この過半数の小さい農家、もう小さいからいいよって言われちゃうと、実はとんでもない量の水田が放棄されてしまうっていう問題があるので、まず小さいところの農家もどうするかっていうのも巨大な問題でありますので、そこの調和のとれたといいますか、地域全体として、ビジネスとしてごりごりやってるんで、ビジネスとして若い人が入ってくるって領域と、リタイア農業でもね、それはそれで充実した人生があり、また、言い換えるとあんまり言ってると政府批判なりますけど、いや、僕ももうすぐもらいますけど、どう考えても左うちわで暮らせる年金は出てこないので。

そうしたら、動ける限りなんかやろうってことになりますから、その時の農業ってのも決して軽んじてはいけない農業ですので、そこも含めての作戦立案っていうのが、市長からの委嘱の内容じゃないかなあと思いますので、ご意見ありがとうございます。

他いかがでしょう。はいどうぞ。

(村山邦彦委員)

今お２人、先生と福地さんと両方おっしゃられたこととともかぶる部分あるんですけど、やっぱりそのアンケートのね、一番冒頭の年齢層を見たときに、これ 70 代以上の人が半分以上の意見だなあと思っていて、この話の作り方が、今先にアンケートの結果を出して、これから計画の話するよっていう流れに結果的になってしまってると思うんですけど。

それって何ていうか、市役所だからしょうがないけど、総花的にみんなが満足するようなものを作ろうというのは、無意識にもかなり働いちゃうんじゃないかなという気がするんですよね。

むしろこれ計画立案なので、かなり大胆に、もうちょっと先にビジョンとか、こうあるべきだ論みたいなのがしっかり議論されて、そこから逆に戻ってアンケートするぐらいが本当は必要なんじゃないかなっていう気はちょっとしていて。

今おっしゃっていただいた、まさに後継者をどう呼ぶかっていうところに関しては、何ていうかな、アンケート通りでみんなを農業者がこうして欲しいからって僕あんまり上手く行く気がしなくて、思い切った何かこうポンと出してるものに対して何か伊賀市面白いから寄ってこようかっていう若い人は来るかもわかんないけど、多分何となくおざなりにしてるのってすぐ伝わるので、多分来ないだろうなっていう感じがします。

それで、今あと経済的にどう食っていくか問題も当然あると思うんですけど、やっぱりもう今二極化というか、その小さい農家と、経営体として生き残ってく農家っていうの分離がもうどんどんどんどん激しくなっていて、県外に出荷する人って県外の農家も自動化とか、規模化がものすごく進んでるので、多分そこの後継者っていうと、さっきの統計データだとそれこそ伊勢ファームさんとか養鶏でドーンと来ちゃうぐらいのそういうインパクト、それが好きかどうか別として、そういう、そもそも勝てるような経営体の育成っていうのと、或いは今度逆に地域の小さい農家をどう助けようかって思うと、多分外ではもう戦えないので、地域内流通をどう充実させるかとか、そういうテーマが割と出てくると思うんですよね。

それって多分、掛け声だけではいかなくて、じゃあどうやって地域内流通をやるかとか、その辺の座組みを作るとか、その辺はキーになってきそうな気がします。

ひとまずちょっとそんなところ思いました。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。そこもうまく、実は打ち合わせを月曜日にやっておりまして、実はある程度その辺の議論も出てて、要するに何て言うかな、総花的って言いましたけども、実はやっぱりその両者調和が取れる方法ってのは、工夫すればあるなというところです。今答えを言っちゃうとそれが答えって話になっちゃうので、答えじゃないんですが、ご意見ありがとうございます。

だから一方で、逆に言うと、スローガン的なものを先に出すとちょっと難しくて、もう一方で、実はねガリガリ稼いでるビジネス化した人って、後継者をどうしようかっていうのは、何て言うかな、私の行為に近くなってくるんですよね。地域農業の、みんな 70 の年金農業だけど、どうやら次の世代年金不足してるけど農業こないっぽいよみたいなときに、やっぱりどうやって農業来てもらおうかっていうときの後継者とはやっぱりちょっと筋が違うところもあるので、一概に後継者っていうくくりでもちょっと実は難しいところもあろうかと思います。そこも、フジヤマさんも視野に入ってるということだと思

いますので、計画の中から垣間見れてくるかなと。

ですので、この議論はそれを、今僕が批判してるわけじゃなくて、その目線で計画の方見ていただきたいということです。

状況分析に関してはあまり、そうだろうねっていうことだとは思うんですけど、いかがでしょうか。

僕の立場からすると、この数字はこうじゃないかっていう。別に批判しろって意味じゃないですから、どうでしょう。それぞれ、お願いします。

（泉川道子委員）

愛農高校から来ました泉川です。私はアンケートの結果を見て、そんなに、なんて言うんですかね、思ったほど絶望的じゃないなっていうか、先ほど野中先生もおっしゃったんですけれども、70 代の方々がこれだけ積極的に前向きにアンケートにこたえようってしてくださってること自体がいいなっていうふうに思いました。

僭越ながらなんですけれども、私ども伊賀市にある愛農高校は、日本で一番小さな有機農業を教える高校で、全校生徒 75 人しかいないんですけれども。2011 年にフードアクションニッポンアワードというのをもらっており、2022 年にはグッドデザイン賞っていうのを、教育プログラムの方で受賞しています。

それはやはり、小さな家族農業っていうことも、言葉もあるんですが、小さな現場でより確実に農業に従事する、農業が好きだと言って卒業する、高校生を世に送り出しているっていうことが評価されるようになってきた。

今までの時代だともうガン無視というか、気にも留められなかったし、そんな農業者、若者農業者がそれだけいてどうなのっていうような感じだったと思うんですけれども、なんて言うんですかね、豊かさの価値が変わってきたといいますか、３.11 以降、本当にその食べ物が安心安全であることが豊かなのだと思われるような社会に、ちょっとずつですけれども、なってきているんじゃないかなっていうことで、実際に非農家のお子さんとして愛農高校に入ってきて、今現在農業をやっている卒業生も結構いるんですけれども、残念ながらうちは全国から生徒を集めている全寮制の学校なので、また自分たちの地元に帰っていってしまって、なかなか伊賀で農業をやってくれている卒業生って本当に２人ぐらいしかいなくて。なんですけど、その２人をどうとらえるかっていうことも大事かなっていうふうに思います。

それで、大量生産・大量消費の時代はもう終わっていると思っていて、より小さく、確実に地域の台所を支えるといったような感覚で、健康にいいというかおいしい新鮮な食べ物を地域の人たちで分かち合って、暮らしを立てていくっていうふうなコンセプトってどうなんだろうかと、すいませんもう全然無視してもらってもいいんですけど、私も農業全く明るくないので、なんかそういうのってどうなんだろうって近くの青山町の近くでマルシェやったりとか、地元の人たちに本校の農産物を喜んでもらったりとか、そういう現状を見ていて、本当に高校生が農業やってるだけで嬉しいんだよって言ってくださ

るような方々とお出会いする機会が多いものですから、本当に教育の分野でも、子供たちは農業やって明るく元気になっていきますし、うちはスマホ禁止なんですけれども、スマホもゲームもせずに、朝から牛舎に行って乳を絞ったり、養鶏部で卵集めたりして喜んでいるというか、それを一生懸命やってくれている生徒たちを見ていて、本当にそんなに嫌いじゃないんじゃないかと、農業が。なので、70 代の方々にも、ちょっとアプローチの仕方を変えたら、農業っていうか食べ物を、人々の食べ物を作るっていうことに対して、喜びを感じる若い人たちは案外いるんじゃないかなっていうふうに思って。

なので、オーガニックビレッジ宣言もしましたし、そこの忍者の食堂でも本校の卵を出していて喜ばれているみたいですし、何かそう、何て言うんですかね、食べ物から農業を見るというか、小さく農業をやる。

だから、大きく農業をやることも大事なんですけど、小さく農業やるとか、あとオーガニック給食で、市町にですね、給食のお米を有機米を買ってもらう仕組みを作るとか、千葉県のいすみ市とかもやってますけど。そういうようなことなんかも今後取り組みの中に入れていくと良いのではないかとちょっと思ったりしました。

すいません。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。あんまり僕今日しゃべんないようにしようかなと思ってたんですけども、今の話ちょっと膨らませるとですね、僕最近伊賀市で調査して論文一本書いたんですけど。どういう内容かっていうとですね、米には白米経済と玄米経済があるんじゃないかっていう話で。米騒動、あれ白米の話ですよね。僕の家には生じなかったんですよ。集落の衆から分けてもらってるから。よく考えてみたら多分玄米で流通してる範囲では米騒動ってなかったんですよね。昔は玄米もっと多かったから、やっぱ不足があったりしたんじゃないかなと思うんですよ。統計的にはあんまり出てこないんですけど。

そのときに、玄米経済で回ってた、自給で食ってて誰かにやってたけど、ちょびっとやるのやめて、じゃあそんなに困ってんだったら問屋に出してるよっていうので調整がきいてた可能性があって。今こうやって農家数減ってるから、玄米経済んとこが細くなっちゃったんで、白米経済一辺倒になったからちょっと足んないぐらいで大騒ぎになるっていう可能性があるなというふうな視点で、伊賀市を調べたらですね、集落によるんですけど、4割がた保有し、保有っていうか何か売らないで止めてるところもあったりなんかしてですね、意外と他の統計データで見ると、兼業化っていうか、小さな農家の数が減ってるんですけど、玄米経済のところが非常に多いっていうのがあるんですよね。

この玄米経済っていうところが、今の小さく作って小さく食べるっていうところに通じるかと思うんですけど、これすごく魅力的で、今後、米どうなるかっていうのの見込みがちょっと立てられないし、市の政策として、今後米は上がるからさ、っていうのはちょっと外れた場合とんでもなくなるんで言えないんですけど、不安定化するっていう前提に立つとですね、案外玄米経済に参加した人多いんじゃないかなっていうのがあるんで

すよね。

そうすると、伊賀市って結構玄米経済しっかり残ってると思うんで、そこ大事しようよ。そうすることによって、伊賀市の生活って安定してるよねっていうことに繋がるし、非常にいい仕組みなんじゃないかなと思うんですよね。

で、米を、例えば 10ｈａってビジネスでやるんだっていう方からすると、いやそうは言ってもと思うかもしれませんけど、よく考えると、玄米で売るっていいですよ。精米費とか流通費、取っ払いでこっちに来るから、というふうに考えると、意外とね、意外とそういう、自給的なっていうかちっちゃくっていうところに、実は僕はもうちょっとガツッと稼ぐんだっていうところがのっかれるところも、余地はいっぱいあるので、そういう目線もですね、僕大事だよねっていう話を、月曜日の打ち合わせのときにさせていただきました。

ちなみに、米の需給関係でいくと、全国的に見るとですね、もちろん自給率 100%。ちょっと超えるから余るぐらいなんですけど、都道府県によって違ってて、中京地域でいくとですね、名古屋は 20 数%、ごめんなさい、人口１人当たり 60 キロ食べるみたいな統計が出るじゃないですか。ということは収穫量を人口で割ってあげれば大体その県どんな状況かってわかるんですよ。愛知県だと 25 キロぐらいだから、40 キロぐらい移入してこなきゃいけないんすね。岐阜県は 50 ちょっとぐらいだったかな。10 キロぐらい持ってこなきゃいけない。三重県は逆で 70 キロぐらいだから 10 キロぐらい、他の県に上げられますよって状態なんですよ。

で、全体で見ると、実は中京地域って結構需給バランスがかなり良くて、関東とかだと東京はもうほとんどゼロとか、意外と神奈川も全然ないよみたいな話になるんでね。ああいうところは東北から買ってこなきゃいけないんですけど、東北から見ると逆に言うと米どころで人口少ないから、人口１人当たり、500 キロ取ってますみたいな世界に入るんですね。ていうところで、中京地域やっぱり結構ね、自給自足的な地域内でのっていうマーケットの特徴があるんですね。

ここも実は、ガツっと稼ぐんだ、もう他産業並みに稼ぐんだっていう米作農家と自給的な農家が、実はお互いに助け合って、調和的な世界を作るっていう鍵があるなあと。

ちなみにフジヤマさんに調べてもらったんです、計算してもらったんですけど、伊賀市だけ見ると、人口で収穫量あると、210 キロちょっとぐらいあるというお話なので、県で見ると福島県ぐらいの、主産地だけどちょっととる、売らなきゃいけないねっていう感じですけど、伊賀米はほら、全体としては数量少ないので、そんな頑張って東京で売るかっていうような課題は実はないんですね。

やっぱり隣の愛知県とか、それこそ名阪国道を通って大阪で売れば売り切れちゃうから、そういう感じになるんですけど、だから自給自足ではない、いかないんですが、もう１回言うけど、すごく稼ぐっていうところの人と、小さく作って小さく食べるって人が共存することによって世界が完結するっていうのが伊賀市の米ではないかっていうのを月

曜日ちょっと議論したので、今その話で、ちょっと遠慮がちに言ったのであれなんですけど、僕らの研究なんかでもそうだなっていうところがあるので、ぜひ、そこの貫徹して、しかも、意見の方で、ご意見、見ていただきたいなと。後ろの方の、今日のね、後ろのパートでお願いします。

なんかちょっとなんか、結局僕はしゃべって、場がしらけるみたいなのがあって恐縮なんですけども。

もう順番に聞いちゃうかな。お願いします。

（行方典子委員）

私もですね、このアンケート結果を見て、泉川委員がですね、70 代以上まだこうやって積極的に答えてるっていいじゃないかって話あったかと思うんですけど、私もそう思います。

というのは、先日、自分の１年間の仕事を上司に聞いてもらって評価を受けるってのがあるんですけど。その時にですね、その上司から出されたのは、平均寿命の表だったんです。あなた後、まだ 30 年以上生きますよと。もうでもあと、県職員であるのは数年ですよね。先を考えてくださいっていうふうに言われました。

で、正直言ってあまりこう気にしないようにっていうか、見ないようにしてた思いがあってたんですけれども。いや、そうだ確かに何しようっていう、そういったときに、70 代 80 代、まだ 60 じゃないので、そういった年代が元気で、前向きにやってるっていう姿っていうのはすごく、勇気をもらえるし、魅力的だなと思います。

なので、多分今やっている 70 代の方にお話をじっくり聞くと、すごくいいお話が聞けるのではないかなあって思ってます。

その話というのは、若い世代にも、私の世代でも響くものじゃないかなあと思ってます。

それでですね、第１回目のときも、ここでお話したんですけれども、伊賀っていうのは本当に綺麗なところだなと思います。この１年ですね、163 号とか 55 号通ってくるときですね、もう１年通して見てて、常に草を刈ってたり、野焼きされてたり、あとしかも田起こしを稲刈りの後すぐされてて、また冬のときもされてて、これでもかっていうぐらいされてて、本当に綺麗なところです。

そういった努力があるからだと思うんですけど、お米もおいしい、今年も、令和７年度産もですね、特Ａ獲得されました。もう当然だなんて、三重県で１つだけなんですよね。当然だなって、私は思います。で、米だけじゃなくって、肉もおいしいんですよね。伊賀牛も。他にもおいしいもの、アスパラガスであったりとか梨であったりとか、いっぱいあるんですけれども、そういったことを事務所で私が率直に言いますと、事務所の伊賀の方たち、伊賀の地域の方たちからは、そうでしょうっていう答えが返ってきます。

よくあるのは、いやそんなことないですよっていう答えが返ってくるのが多いかと思うんですけど、そうじゃなくて、そうでしょうっていう。なんてうらやましいなって、この地域うらやましいなって思いました。そういう気持ちを持ってるってのはすごい大事

だと思います。地域を愛してるっていうのは、その郷土愛っていうんですかね、そういったのは、ずっと引き継がれていくんじゃないかなあと思ってます。

話は少し変わりますが、休みの日にイガプロっていう、伊賀地域の企業の方たちが出展されて発表されている場がありました。そこに個人で行ってみたんです。そうしましたら、ちょっと企業の団体数、そうですね、30、40 ぐらいあったかと思うんですけれども、ＤＭＧアリーナですかね、そこだったんですけども、たくさんの子供と若い親の方たちがこられてて、企業数も多いからだと思うんですけれども、こんなにたくさんの方たちが興味を持ってこられるんだっていう。この方達が、農業の方にも興味を持っていただけたらなって思いました。何かこう、多分触れる機会がなかなかないのかなと思うんです。もしそういう機会があれば、興味を持って来てくれるんじゃないかなと。

あと、伊賀の学校給食っていうのは、伊賀米であったり伊賀産を使ってて、栄養教諭の方たちがたよりにも書いて、一生懸命ＰＲというか、そういったのをしてくれてます。

で、親も見てると思うんですよ。だから、何かこう経験とかできる場があったら、きっと参加してくれるんじゃないかなと思います。子供が興味を持てば、その親も興味を持つ。で、何か体験すればもっと興味を持って、農業、農村の維持発展に関わる関係人口を増やしていけるんじゃないかなと思ってます。

あと、三重大学のサテライトもありますよね。結構、農業ではなく産業系の方で活動されてるかなと思うんですけれども、学生の方たちも繋がっていけば来ていただけると思うので、そういった大学との連携っていうのも考えてみると面白いのかなと思ってます。

とにかくですね、伊賀には文化もありますし、ちょっと話が長くなって申し訳ないんですけども。最近は雨が降ってますが、渇水でですね、ため池等に水がたまらないと稲作はできません。雨乞いの踊りをやったっていうのが、新聞に載ってました。そしたら実は、うちの事務所の人も出てたんですけども。そういった文化が残ってるっていうのも、すごいなあって。ますます伊賀って、深いなあっていうのを感じています。

だから、今その企業とかできている子供や親やね、企業の方たちとか、そういう方たちとももっともっとこう繋がっていくと、伊賀っていうのはますます面白いんじゃないかな。野中先生言われたように、消費者もだからたくさんいるんですよね。繋がっていくと面白いじゃないかなと思ってます。

すいません。私事でちょっとこんなところで言うのもあれなんですけども、実は私４月からですね、農業大学校に移ります。で、県で農業の担い手を育成するところなんですけれども、例年、数十人の方が入学してみえます。で、非農家の方が多いです。全員が全員農業やりたくて入学してくるわけではないかと思いますけれども、就職先を見ると、法人、とかが多いし、またその関係のところであったり、あと関係ないところであったりなんですけども。農業やりたいって思っても、今、農地は借りられるかもしれないんですけれども、非常に費用がかかります。まず、機械ですよね。とか施設、で水道光熱費、そういったのを試算すると、とても、卒業生農業やりたいっていう子がいても、農業を勧めるかと

いうと、ちょっと難しいかなって正直すいません、まだわからないんですけど思います。

地域で、農地だけじゃなくって、機械とか施設とか、やりたい人がいたら入れるよというような、そういった体制というんですかね、組織でもいいんですけど、そういったのも考えていってもいいのではないかなと思ってます。

繰り返しになりますが、毎年数十人が農業大学校には来ております。野中先生は外部評価委員会の委員長なのでよくご存じかなとは思うんですが。

以上です。

（野中章久委員長）

非常勤講師もやってますね。

ちなみに、水稲に入るのは難しいですよね。そういう機械すごい高いから。中古で買ってって話もあるけど、中古だって高いですよね。だからイチゴとかハウス、施設物だとうわものさえ何とかなれば何とかなるんで、市内でも、トミベリーさんところから働いてた方が青山の方で独立したとか。組織的にやってるのはあぐりん伊勢なんかがそんな形。

だからやっぱり、職人と考えると、一応丁稚に入るっていう感じでのれん分けしてもらうっていうのが１つの方法かなというふうに思いますよね。

ちなみに、三重大のサテライトはかつてはバイオディーゼル作ってたので、伊賀市で菜種作ったりとか、はい。大山田農林公社と組んで搾油の話とかもやってますけど。

最近なんか変わって僕ちょっとよくわかんないすけど。どうなんですかね、なんか忍者の研究してたりするんで、最近三重大も何か方針がよくわからないんですけど、確かに工学部の方が所管してたように思いますので。そういうふうになろうかと思います。

ちなみに農業体験って意味でも、僕玄米で買ってもらって、ぜひ、消費者一般の皆さんにはコイン精米機を味わってもらいたいという。単純ですけど、あれ農家の人に生まれてるとコイン精米機って普通かもしれませんけど、僕みたいになんていうか、工場労働者の倅だと、あれ使うのとてつもなく楽しかったっていう話があるので、ありがとうございます。

ぜひ皆さん、それぞれご意見いただきたいと思います。

特にアンケートの話でも、これはこうだよねって話、用水が問題だっていうところはね、月曜日も議論になって、いや老朽化してる、じゃあどうしたらいいのって、農政局にかけあうのと思ったけど、自分たちで中山間多いから自分たちで引いた水路が結構あんだよねっていうところもあろうかと思うんですよね。

そうすると、実は農政局管轄じゃなくなっちゃうので、改修とかは結構、自己負担みたいな話になってくると、つらくなりますよねみたいなこと、もし身近なところであればそういうところもそうなんだよっていう話を共有化していただけるとですね、後ろの政策の方に、反映できるかと思いますんで、よろしくお願いします。

（川瀬成清委員）

アンケートの内容ですとか現状認識の整理については特にはないんですけども、その

アンケートで、今も 70 代の話がありましたけども、それはそれで、いいよって言ってくれてる方もいらっしゃいましたけども、僕はうーんと思うところもあって、ただ、それは 70 ではもう仕方ないのかなというふうにとらえてます。

ただ、このアンケートとしては、46%で十分やというふうなことを言ってくれたんですけども、僕は 46%で大丈夫なのかという、70%ぐらいいかなあかんの違うのかな、700 件ぐらいはアンケート取らなあかんのかなというふうに考えてます。

ただ、今更もう一度取るというのもなので、例えば今入ってない、取れてなかった 30 代ですとか、あと少なかった 40 代についてはピンポイントで今後のこの計画に対しての意見を頂戴するかというような方法で入っていただいたらどうかなあというふうに思います。

ともう１点が、この現状整理について非常に見にくいっていうのが、年数がバラバラっていうか、平成 26 年から令和６年とか、あと平成 22 年から令和２年とか、全部３段階ぐらいこう中で使われてるんですよ。

あと 10 年間のやつと５年間ですとか、これは１つ統一した方が後で見るのに非常に見やすいので、ここがバラバラだと全く見にくいものになってしまいますので、統一していただくようによろしくお願いしたいと思います。

もともとセンサスとか、出典元が違うので難しいのかなあと思うんですけども、何とかそこは統一して欲しいなと思います。

以上です。

(野中章久委員長)

じゃあ、次お願いします。統計の話はまた後で回答いただけますか。はい。

(南友照委員)

自分の方も、やっぱり 70 代が多いっていうこと、結果ですけど、やっぱりちょっと危機感の方が強いです。この計画自体も、やはり 10 年先っていうところを見越して作る、その 70 代の方の 10 年先はどうこうというつもりはないんですけど、やはりそこの意見で作ってしまう計画では、やっぱり今後、その 40 代 50 代、本当は 30 代含めて担っていく方々の意見がやっぱり反映されていかない。ということは、やっぱり実情に合ってないような形が出てきてしまうんじゃないのかなと。

僕も本当にいろんなところで、溝堀であったりとか、畦畔の草刈、俗に言う出合いという作業が今頻繁に行われてまして、いろいろ参加はさせてもらうんですけど、やっぱり出てきてる方、非常に高齢の方が多いです。それこそ本当にこのアンケート結果にあるような 70 代 80 代の方。やっぱりここの自由意見のところにもあるんですけど、何か維持管理とか鳥獣被害、耕作放棄地っていうこういうキーワードが上がって、上位に上げてくれてるんですけど、やっぱりいろいろそういう方と話ししてると、自分ができる間は俺がやるんやと。もうぎりぎりまでやって、もう無理やからやめるわと。でもその時点では息子さんいるけど、もうこっちにおらへんねんみたいな。アンケート結果の方に継がせるつも

りはないっていう項目があったと思うんですけど、多分継がせるつもりはないというのも継がせられないっていう状況に多分もう今なってしまってるのじゃないのかなという感じがすごくしてます。

なんか僕、本当はここが、ＪＡさんとかでも今その事業継承っていうのをいろんなプログラムみたいなものを作っていただいて、多分大規模な形態の方で事業継承やっていきましょう、担い手でやっていきましょうみたいな話も上がってるんですけど、本当は多分この個人でも事業継承っていうのを、きちっとやっていけるような仕組みっていうのを作る必要があるのじゃないのかなと。大きいところはもちろんある程度利益を追求しながらやっていって人も雇用してれば、その雇用した人の中から多分事業継承、継いでくれる人が出てくる可能性はあると思うのですけど、個人の場合本当に難しい、死活問題になってくると思うので。

先ほどあったように、例えば農大を卒業して農業がやりたいっていう子がいるんであれば、その子を例えばその地域である程度面積をやられてる方のところ、第三者継承という形でこう持っていってあげるとか、そういう仕組みをやっぱりこの計画の中に盛り込んでいく必要があるのかなというふうな感じがしました。

（野中章久委員長）

ありがとうございます。何か血筋じゃなくね、継承するっていうのは他地域でもね、結構最近職安経由で人が来るって話もあるので、重要なとこじゃないかなと思います。

いかがでしょう。

（前川良文委員）

前川と申します。先ほどからお話されてるような問題課題、やはりこのアンケートの結果が語ってると思います。70 代前後の方の意見が反映されておって、問題ばっかり課題ばっかりというアンケート結果です。これもう当然そうなると思います。ここをどう、魅力ある農業、伊賀の農業に変えていくかっていうのが問題。

だから、生産する立場で、農業者が関わるとしたら、私はもういろいろなことを考えるんですね。生産だけ一生懸命やってもらう。だけども、その生産したものを販売するのは、販売の、知恵のある、知識がある業者さんとか、そういうアイデアを持った方に、委託をする、連携をとって。この連携によって地域を維持していく、魅力あるものに変えていく。これが大事かなとそんなふうに思います。

村山さんおっしゃったように、いろいろな立場立場で、やはり魅力ある、魅力を感じてるのは違いますよね。愛農もそうですよね。私も愛農の卒業生なんですけど、農業してません。だけども、農業しないけども、農業に魅力のある、そういうふうなアイデアを出したり、障がい者の方に後継者になっていただくような農業の仕組みを作ったり、いろいろと努力をしております。

だから、連携をもって何かを組み立てていく、それが大事かなと。それをやっておるのが私たちの、農福連携の活動ということになります。だから皆さん方の意見というものを

しっかりと問題、課題を解決する魅力ある農業に持っていけるような、そういうな委員会でありたいなと、そのように思います。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。続いていかがでしょう。

(松裏充彦委員)

私が思ったのほとんど南さんがおっしゃってくれましたんで、この調査結果のところの、20 歳未満、20 代 30 代ってあるんですけど、20 歳未満とか 20 代の方へのアンケートはとられてあるというか、宛先はあるんですかね。

(株式会社フジヤマ)

はい。20 歳代も、アンケートは発送しております。

(松裏充彦委員)

そういう方にもできたらこの委員とかになってもらえたらよかったかなっていうのは僕の、まずスタートのところでね、その意見があります。もう今更なんですけども。若い子たちの意見が全く聞けないっていうのも、まあね聞きたいところでもあるんですけど、実際私のところに今日も相談に来てくれた若い方がいるんですけど、農業ってどうやって始めるんだろうっていうのを聞きに来てくれてる方が数名いてくれてるのが実態、それなのかなあと。

実際その人口のリソースがそもそも減少している中で、何ていうんですかね、農業に入る選択肢がまず、なり方がわからないとか、概念に農業っていうのがまずないっていうところで、選択されない。選択にも入らない。ここからまず変えていかないと、夢じゃなくて現実問題無理なんじゃないかなと思います。

なので、農業大学校に入って就農するであるとかそのルートをきちんと、告知というかわかりやすくというか、例えば高校の就職のタイミングでとか、何かの折に差し込んで農業っていう人口を増やしていけるようなところからなのかなとは思わなくもないです。

あまりごめんなさい、語彙力がないものでこれぐらいしか語れないんですけども。

以上です。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。なんか新規就農の話はね、必ず議論される話なので、そういうところあります。実は僕働いてるのも農学部ですから、100 人ぐらいいるとですね、２人ぐらい、農業やりたいんですけど、先生どうですかって来るんで。どうなのかなあって、農業経済としてはどうですか、農業経営としてどうすればいいんですかって来るんですけど、いや悪いこといわないから公務員試験受けろよって即効的に言っちゃうんですけど。

実はいやちょっと真面目に言うと、地元に根差した、要するに全国的じゃないところに就職して、古民家買えと。集落住めと。出合い出ろと、草刈しろと。可能であれば田植え手伝ってみろと、そっから始めていいんじゃねえのかみたいな話であって、もう現実とし

て、プロとして、最初からもう全所得をそこにかけるってのがちょっと難しいので、逆に言うとやっぱり、10 年ぐらいだったら今の年金農業みたいなスタイルはあんまり変わらないので、逆に言うとそこに向けての助走を作るっていうのも、戦略としては重要。

なおかつ、さっき言ったように収益性の高い施設園芸とかだと、もう丁稚入ってこいよと。逆に言うとね、そっちは入ってこいって、修行しろと。すげえいい、高いものをつくれよというのの組み合わせでいいのかな。とかみたいな議論は、もう、何ていうか、フジヤマさんとか、事務局とはしてますけれども、そういうことは視野に入ってるんじゃないかなと思って思いますけども。

ご意見ありがとうございます。

副委員長、どうですか。

（森下光子副委員長）

まさに皆さんの意見、もっともだなっていうのを聞かせていただきました。

農業委員の立場から言うと、一番最初に福地さんが言われた、本当に新規就農者。新規就農者というのは新しい外部からでもあり、さっき言われた 70 代の息子さんたちが、お父ちゃんそこまで頑張ってるんやったら、ちょっと魅力出てきたから俺、半農半Ｘしてみるわ、ほんならもうちょっと、退職間近やけど、１回農業をしてみるわっていうような、その小さい地域社会で、もう少し農家人口が増えて、魅力ある農業を発信できたら、それにはやっぱり県だけでなしに、市側の行政からも、何らかの補助的なもの。

私印象に残ってるのが、何か前回南さんと廊下でお話したときに、よう頑張っておられる、もう若いときから見させていただいてるので、頑張ってよかったなあいう話から、でも僕たちはやっぱり、水路の問題とか、やっぱり傾斜地が多いんでそういうのは若いものが頑張らないかんと。

一番の問題は天候に左右されますが、基本的には水も天候とすべて農業は関連してますので、そういったその水路の関係も、行政とは関係ない部分であっても、新規にされるんやったらそこにはちょっと補助出しましょうかとかいう、そういう水路の方も面倒見てあげたら若い子やろかなあ、ほなできるわなんて言うんかな。

まずは小さい農村のとこから、少しでも父ちゃんのお手伝いして俺米つくるわ、ちょっと野菜作るわっていう人口が少しずつ増えていったら、ありがたいかなあと思ってます。

とにかく農地を守って欲しいと思うのが、農業委員会からの立場です。

（野中章久委員長）

ありがとうございます。

すいませんいろいろご意見ありがとうございました。事務局、さっきのグラフの作り方の年次が違うってのは、もうすでに何かご指摘の通り、出てくる、利用できる統計の制限ていうこともあろうかと思いますけども、その辺はいかがでしょう。

（吉福農林振興課長）

すいません、皆さんの活発なご意見ありがとうございます。

グラフの統計年度の違いについてはですね、先ほどご質問いただいた委員さん自らおっしゃっていただいたように統計資料の関係でですね、どうしても年度がぴったりそろうというのはなかなか正直難しいのかなと思います。

ただ、一定の年度のですね、ある資料は平成26年からと比較的古いものを使用しているものもあれば、比較的近い５年間見比べているようなものもございますので、その辺はある程度年代的な幅をですね、ある程度そろえたような形で最終的には整理できればいいのかなと。それであればいろんな資料の連携が深められることができるのかなというふうには思ってます。

また、先ほどアンケートの年代構成についてですね、20代の方、フジヤマ様からも20代の方もアンケートを対象にしてたというようなご発言もありましたけども、アンケート調査結果の資料②のですね、調査対象を見ていただきますと、伊賀市に在住の伊賀市に農地のある耕作者というような形でですね、農家台帳の方から抽出した加減で、20 代の方がゼロというわけではありませんけども、なかなかやっぱり20代の方で土地をお持ちの方という、やっぱりそもそもの母体が非常に少ないっていうのも、１つちょっとこの20代の結果が出てない要因の１つかなというふうに思っております。

それを補完する形というわけではございませんけれども、実は今月、市長とＪＡいがふるさとさんの青年部の方々がですね、一同に市役所の方にお集まりいただきましてですね、時間は１時間ほどでしたけれども、本当にひざを交えてですね、活発な意見交換の方をさせていただきました。

今回のアンケート結果等々、次の施策の部分についてもですね、その結果っていう部分がまだ、ちょっと反映しきれてない部分が、３月に開催いたしました加減でまだできてないんですけども、補完するような形でですね、若い方々のご意見とかもですね、どういうふうに考えておられるのか10年先の農業を担う主力であろう青年部の方々のですねご意見も、いろんな我々が今まで議論してなかったような観点でご意見も頂戴できたかなと思っておりますので、またその辺もちょっとまた一定、当然今後の施策でありますとか方針でありますとかいうのを考えていく中では反映させて参りたいというふうに思っております。

若い人の意見を聞く場の１つとしてですね、先ほど出たタウンミーティング等々も上手に活用しながらですね、意見の方は聴取していきたいなというふうに思ってます。

また、先ほどから何度も農業大学校のお話出たかと思いますけども、またこの後のちょっと次の資料③の詳細の部分で触れるかなというふうに思ってたんですけども、伊賀市の方でもですね、伊賀市の農業アカデミーということでですね、農業大学校だけではなくてですね、伊賀市内の農家様に派遣するような形でですね、農業技術の習得というような形の制度ができないかということでですね、来年度１年間いろんな検証も重ねながらですね、そういうふうな事業も構築していってですね、若者の新規就農に対する知識の学びの場を提供できるような形で構築できないかということもですね、今回の計画の施策の

中にも盛り込んで参りたいというふうに考えておりますので、そういうふうな中でこの農業を始めるきっかけというような形の場も検討して参りたいというふうに考えてるとこでございます。

（福山産業農林部理事）

すいません、もう１点だけですけども、先ほど三重大との連携ということでサテライトのお話がございました。で、今、実は三重大の渡辺先生の方とＪＡさんの方で、大山田コンポの堆肥の方ですけども、大山田コンポを土壌にどれぐらい入れていくのが一番目安としていいだろうというような研究を、しかも伊賀っていうところは、山間地から平地までいろんなところがあって温度差もあってっていう、なかなか面白い土地がたくさんあるというようなことで、そういった研究を今連携でさせてもらって、この４月の２日だったと思うんですが、学生さんがもう入ってもらってますんで学生さんの論文の発表というような形で、報道の方も来てもらうような形でやってますので、全然何もやってないということではなく、農業分野でもやってるということをちょっとご紹介させていただきます。

（野中章久委員長）

ありがとうございます。

それでは次の議題の方、これは計画案ですよね。

これ、ちょっとね、実は議論難しくて、月曜日の打ち合わせのときもですね、いやちょっとこれ、僕としてはちょっと議論しにくいな。難しいかなと思うんですよ。

具体的にこれやりますって話が出てくるんで、いいよいいよ、これどうすんだって、これもやるよって話は言いやすいんですよ。ただ、よく考えると、市役所なり市なりで作る計画なんですよ。

で、例えば自給率100％にしますみたいのを書こうと思えば書けるんですけど、じゃあどうすんのっつったときに、補助金だそうぜみたいな話をここにしてでもですね、予算っていうものがやっぱりあるので、新しく事業を組み立てるの起こすのかとか、それ市役所なのかとかっていう問題もいっぱい生じてしまうんですよね。

だから１つはですね、今日ちょっと説明されるのかもしれませんけど、あらかじめちょっと僕の方から、月曜日の打ち合わせがこうでしたってこと言っときますが、現実に今動いてる事業があるじゃないですか、こういうことやってますと、市役所としてこういうことやってますということはこっち側であって、このアンケートなり我々の議論で新しくこれもやんなきゃいけないよねっていう議論が出たとき、この計画もそうなんですけど、こうやりましょうねって言ったときに、それが従来の事業ですでに取り組まれてますよっていうのもあれば、新規にやんなきゃいけないですよっていうのもあれば、それって、農林水産省の事業にありますよねっていうのはあったりするんですよね。

だから、今回は素案の素案というか、１回目初めて出てくるやつだから、今後この議論を進めていきますが、前提として、予算は制約があるんだけど場合によってはそれはお金

すごくかかるから、こういうふうに類する事業が農水にあるからこの農政の事業取りに行きましょうと、というねらいが後ろ側にあるんですよとか。いや、これはもう今やってますから、これ今まで通りこれでやりますよというのを確認したりとかですね。あとこれはやってないけど、ぜひ何とか工夫して、やれるようにしましょうよっていうようなのを対照表みたいなね、すでに走ってる事業とこれはどういう、国もあるのかどうかとかっていう対照表を整理をしながらこの議論を進めていこうと。行ったほうがいいんじゃないですかって話を月曜日にして、事務局とフジヤマさんに今作業していただいてるんじゃないかなと思うんですけど、そういうのがあります。

ですから、今日は間に合わなかったんですが、こういうたたき台、何回も議論する中で実際問題それの予算どうすんのみたいな話は、これ取りに行こうぜっていうのがちゃんと明記されるようには準備をしましょうねってことには打ち合わせの方ではなってます。

その前提で、この内容を議論していただく初回の議論としていただければ、忌憚ない意見を返すことによってですね、皆さんの意見が反映されますので、そういう議論の仕方をさせていただきたいなというふうに思います。

では説明の方、お願いします。

(藤森農林振興課主幹（計画担当))

失礼いたします。それでは資料③の方をご覧いただきたいと存じます。

事前にデータの方は委員の皆様には送らせていただいておりますので、ちょっと今日は時間の都合もありますので、資料の説明は大分端折らせていただきたいなと思いますが、１ページめくっていただきまして、まず目次を掲載しております。

第１章伊賀市夢のある農業振興計画の策定について、第２章として伊賀市の農業・農村の現状と課題。こちらは先ほどフジヤマ様からご説明をいただいたところでございます。

第３章伊賀市農業・農村の将来像、第４章基本施策、第５章評価指標及び目標値、第６章計画の推進体制といたしまして、これは前回第３回の委員会においてお示しさせていただいた素案と、今のところ変更はございません。

その中でも、今後整理予定と書かせていただいてるところもございますのでご了承いただきたいと思います。

それでは、資料１ページからが実際の計画の内容ということになりますが、ちょっと時間の都合上説明を省かせていただきまして、28 ページまで飛んでいただいてよろしいでしょうか。

資料 28 ページ目にはですね、伊賀市農業・農村の課題整理というふうに記載させていただいております。これが先ほどから議論いただいております、アンケート調査であったり、各農業団体へのヒアリング、こうしたものをもとにですね、農業・農村の課題を整理したもので、各項目、農家、農地、農業生産、加工・流通・販売・消費、農村環境、この５つの項目で、それぞれ現状と課題を整理したものでございます。

これも詳細はちょっと端折らせていただきますが、農家の項目としては、やはり高齢化

であったりそもそもの農業者の減少というところが顕著にあらわれてるかなというところもございます。

こういった農業・農村の課題を踏まえましてですね、第３章に伊賀市農業・農村の将来像ということで、32 ページをご覧いただきたいんですけれども、施策体系を記載してございます。

基本方針、基本方針にのっとった基本施策、基本施策を実行に移すための個別施策ということで、３つの項目に分けて表を整理させていただいております。この中身につきましても、事前にご覧になっていただけてるものということで、本日ちょっと議論を進めさせていただきたいと思いますので、中身の詳細については省略させていただきますが、先ほど事務局の方から説明させていただきましたように、36 ページとなりますが、新規就農者の育成・確保につきましては、農業アカデミーの開講ということで、伊賀市の農業を支える担い手となる就農者を育成し、伊賀市の農業と農村の未来を創造する人づくりに寄与することを目的に、就農者に対し就農に関する知識や経験を取得する学びの場を提供する伊賀市農業アカデミー事業を実施しますと、このようにさせていただいております。

あと、基本施策２の、これは 37 ページとなりますが、多様な担い手の育成・確保につきましては、集落営農への、或いは小規模農家、高齢農業者、女性農業者、或いは農福連携、このようなことを支援及び推進ということで記載させていただいております。

以下は少し時間の都合で説明を省略させていただきますので、ご了承願います。

説明は以上でございます。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。これに関しては、あとでもう時間も迫ってきましたので、もしご意見ございますでしたら、折々いただければいいと思います。

事前ご理解いただき、お手元に配られてるということで、ここの計画のところでご議論いただきたいと。

最初ちょっと説明しましたけども、これもやろうあれもやろうっていう、制限にないように、もう思いのたけ議論いただければいいと思います。財源がって話もありますけども、最初に説明したように、なければ国に取りに行こうぜっていうのもあるわけですから。

全然ない事業だったら困りますけども、大体常識的にっていうか、あるにはあるっていうところがあって、ないならないでしょうがないんですけどね。ていう形でお考えの方を先に、実現性とかっていうかその背景にある、それって市なのそれって県なのっていうのはとりあえず置いといて、意見をいただければいいかなというふうに思います。

ちょっとね突然その具体的な施策なので、議論しにくいかと思うんですが、先ほどの分析の方でのときにお持ちいただいた意見とすり合わせて考えていただくと、ちょっと言いやすいかなというふうに思うんですけども。

はい、お願いします。

(村山邦彦委員)

先ほど割と全体の議論の中で、新規就農者どう呼ぶかって話も結構あったと思うんですけど、それの策として農業アカデミーとか書かれてると思うんですけど、僕も結構これがこうわりと全国でいろいろ関わってきてるんですけど。

やっぱりなんか、今のイメージだとどうしても農家さんっていう感じのイメージになるけど、やっぱり農業者って経営者じゃなきゃいけなくて、やっぱり、今どきどんどんその経営のレベルが上がってるっていうのも正直あると思うんですよ。さっきの資本をどうやって集めてくるのかっていうのも、借金じゃちょっともうできないよねのレベルになったりとか、エクイティ集めるんだったらどこと組むかとか、そういう経営者としての資質みたいな求められてる部分もあるし、それは逆に言うとその１人ではできなくて、やっぱチームで、特に新規就農者とかいって、若い人を呼び込むたときにはもうＳＮＳで発信してないとか動画をつくれてない時点で人来ないですよ、絶対。

だけどその辺に関して、例えば何も書いてないとかっていうのはちょっと無理があるし、そういう人たちがそういう人たちを呼ぶので、おそらく 70 のおじいちゃんがそれを一生懸命口説いてもこないと思うんですよね。ただその、例えば少し前で有機ＪＡＳでその２反ぐらいミニトマトをフロートでやってるところなんかも最近出てきて、エクイティ 11 億調達して、ハウスの設備作ってとかでやるんですけど。やっぱ従業員の目つきとか若い人達がキラキラしちゃってるんですよね。それがいいかどうか正直わかんないです。意外にそれがどこまでできるかってのわかんないけど、やっぱりちょっとそういう、助けてあげるじゃなくて、育てるじゃなくて、何かそういうスターになれる人、少しでもいいから口説いてみんなで連れてくるみたいな目線もあるんじゃないかなっていう気もしていて。困ってます困ってますってところに人来ないんじゃないかなって気がするので。

ちょっとそこら辺が、農業アカデミーとかやるとしたら、特に何か夢語るとか、やっぱりそういうのがないと基本的にはちょっと辛いんじゃないかなと思ったりして。

かつ農業じゃなくて、流通する人とか、八百屋さんも多分、もともと市場もつぶれちゃったし、農協さんの直売所しかないから、直売所連携してどうするかとかそういう具体的な機構がつくれないと地域で本当に回るってのはできないと思うんですよね。

そういうことやれる人材入れるとか、ただ農家を育てりゃいいって話とはかなり思考を切り換えなきゃいけない気がしてるんで、ちょっとその辺がこの施策の中に具体的にもうちょっと盛り込まれてもらえると嬉しいなと思いました。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。これから盛り込んでいくっていう方向でいいのかなっていう、あれもありますけども。もっと今の段階から盛り込めっていう話でもあれば。

(村山邦彦委員)

ちょっとどこに入るかなと思ったときにうーんと思ったんで。

(野中章久委員長)

農業アカデミーっていうのはそういう話も含め、じゃないかなと。

県のね、農業大学校じゃないということなので、実践的な、何ていうか技術を伝授、或いは外部からの輸入ということになろうかと思いますので、はい。そういうご意見かなあというところです。

お願いします。

（泉川道子委員）

今村山さんおっしゃってくださったように、何ていうんですかね、若い人がやっぱり、一番、農業の面白さを実感する瞬間って、やっぱり自分が作ったものが売れるって思ったときだと思うんですよね。だからもう、農業者だからって第一次産業というか生産ばっかりやってるんじゃなくて、作ったものをどう売るかっていうところまで、やっぱりトータルにコーディネートして、経営者としてどうかになるっていう、その売れる面白さ、自分たちが作ったものをおいしいねって食べてくれる人がいるっていう顔の見えるところまでできて、生きがいできるみたいな部分って結構あるんじゃないかなって思うので、やっぱりアカデミーのほうでは、その辺を完結、そのビジョンをしっかりと据え置いた上でアカデミーを経営されていくといいんじゃないかなというふうに思いましたし、若い人の意見が意見がって皆さんに言っていただいて本当にありがとうございます。高校に若くて、農業に積極的な子たちがおりますので、また呼んでいただけたらどこにでも連れてきますのでお声がけください。

以上です。

（野中章久委員長）

ありがとうございます。

農業アカデミー、期待は大きいということですよね。

いかがでしょうか。どうぞよろしくお願いします。

（前川良文委員）

最近よく、農業やりたいという方、うちも連絡が来るんです。

それはどういうふうな農業やりたいかというと、障がい者の雇用をやりながら、一緒に農業をやってみたい。だからそういうふうなアドバイスをお願いします。何かいい案ありませんかみたいな、たまに問い合わせがあります。

だから、農業をやる１つの魅力的な何かがあれば、何か若い人がやってみたいなっていう好奇心も含めてですね。やりがいを求めてる、そういう方が、たくさんではないですけどもお見えになることは確かです。

特に最近、刑務所さんと園芸体験をやって、受刑者さんを農業の分野で活躍してもらうようなという取り組みを始めましたけども、それについても興味を示して、何かいいアイディア、できることがないですかねという、勉強したい方がたくさん問い合わせあります。

だから、何か伊賀ではこういうことをやってる、他ではやってない、こういうふうな農業経営のあり方もある。農地もある。空き家もある。フィールドある。指導もある。だか

らそういうところで農業やりませんかみたいなね、何か魅力のある、好奇心が持てるような、そういうふうなアイデアを前面に出してやってというのも必要かなと、そんなふうに思いました。

（野中章久委員長）

ありがとうございます。障がい者の働きの場っていうのも当然重要ですし、要するに健常者とどう連携してっていうところのね、あり方も新しいチャレンジとしてあろうかと思いますので。

当然その受刑者とかいろんなバリエーションもあると思うんですけど、僕なんか感覚でいくと学生ってのありますよね。さっきはだから卒業生としてってのはあるとは思うんですが、こないだねびっくりしたのが、野中先生、僕山買いたいんですけどどうしたらいいですかっていうんですよ。いや、何すんのって聞いて、森林の研究なんですよ。専門が森林なんで、僕学校で勉強したことを実践して経営してみたいんですよとか言うんですよ。チェーンソーどうすんのって買いますとか言うんですよね。お前頼むからやめとけと。そのうちの集落来て、買いたいじゃなくて、ちょっと練習したいんですけどと一言言えば、二山も三山も、下手したら集落の全部の山でてくるから、それで練習せいと、或いは実験せいと、いう話をしてて。実現するかと思ったらそもそも免許持ってないんで、全く話になんないんですけど、昨日エレベーターで免許とったのかと聞いたら、いやまだなんですとかですね、ちょっと大丈夫かな、どこまで本気なのかなと思いますけども。一方ではそういうパターンもあるので、10 人そういうふうに下宿させて、4 年経ったら 10 人に 1 人ぐらい就農してくれたら、もうめっけもんですよね。

だからそういう、観点もあろうかと思いますので、やっぱりその辺は非常にフレキシブルにね、空き家の連携、解消なんかの連携も含めて、農業アカデミーとか、こういった派生っていうか、関連事業で組み立てればいいんじゃないかなというふうに思います。

非常に大事な観点だと思います。

いかがでしょうか。

（泉川道子委員）

何回もすいません。いろんなね、バラエティじゃないですけど、農の魅力っていうのが最大限発信されるような、いろいろ種類があっていいと思うんですよ。

慣行農業もあって有機農業もあっていい、農福連携もあって、最近はエディブルスクールとかスローフードとか、そういうことも言われ始めてきているので、そういうオーガニックする風土、エディブルそれからウェルビーングみたいな、すべてにおいて農が生きる、生かせるような、そういう魅力のある伊賀市にしていくと、自然と人も増えてくるんじゃないかなあと。

このアンケートのところに、自然環境の次に人間関係っていうところが 67 件あった。これ素晴らしいなと思ってて、要するに副委員長も先日おっしゃってたんですけど、やっぱり伊賀にはその新しい方を受け入れる土壌があるんじゃないかなって思うんですよ。

農業やるときに一番難しいのって、本当に昔からある集落に入っていってのけものにされるっていうね、新しい人が。それが一番苦労してるところなんですけど、うちの卒業生なんかでも。そういう意味でいうと伊賀のその人柄というか人間関係の豊かな部分っていうのが、それも魅力の１つになっていくかなとちょっと思いました。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。

いかがですか。

(森下光子副委員長)

もう皆さんの意見素晴らしいんですけど、まず少し前の話ですけど、農業大学校に行かれる先生には悪いんやけど。往々にして、うちに来た実習生が本を見てます。マニュアル通りに仕事します。汚い仕事をしてくださいって言いました。僕は学校でそんなことは学んでいません。でもあなた、農業や畜産っていうのは、基本的にはここが仕事です。こういうことを経験してもらわんとどこ行っても勤まらないよって言ったときに、教科書のマニュアルには、機械を持ってこう操作する、そういうことが載ってるから僕の仕事はそれですって言いました。でも基本はしっかり、そういうところから学びなさいっていうことを指導したんですが。

今の若い子はノートを見て、イチゴの売上、こうしたらこれだけの売り上げが出ます。ブドウ、これだけの売上が出ます。先に頭で計算して、経営計画、経営計画書を出して経営します。実際、獣害にあいました、天候の具合で、収穫できませんでした。赤字でした。赤字でしたっていうときのショックはすごく大きいと思うんです。だから、中でされるときに、まずは農業って、頭から数字通りにはいかなくて当たり前ですっていうことをしっかり頭の中にいただいて、今新規就農者は重宝されるから、誰も彼も来て欲しいと私は思わないけど、本当にさっき言われた農の魅力に引かれてくる人、私は絶対これが好きやって、こだわりがあって来る人は、少々赤字でもどうにかやっていくと、その根性があると思うんだけど。そういう人が来てくれたらいいなあと思います。

利益次、生業農業、生業ですから、儲けもとっても大事ですが、先ほど先生言われたように、それだけでない、農の魅力も計算に入れた上で、農業しますっていう人が担い手になってくれたら私はもう一番嬉しいかなと思います。

(野中章久委員長)

はい、ありがとうございます。

(福地和幸委員)

いいですかごめんなさい。この少人数の中に、私と同じことを実践されてる方がお見えになりまして、すごくうれしくなって、賛成しますとかどうしますという話ではないんですが、泉川委員さんがおっしゃられた、自分が作ったものが売れたと、目の前で売れたということはすごくうれしくて、私も当初それでスタートした。

私は転職組で、今専業になって 18 年目なんですけれど、もう必死で、売るということ

にだけ目を置いてたんですけれども、もっと嬉しいのは、買ってくれるお客さんと、コミュニケーションがとれる。お客さんから、これおいしい炊き方はどうなんやねんとか、どうやって保存したらいいの、どうして作ってるのというふうな話をキャッチボールができる。そのことに対して、喜びが出てくるんですよ。

だから、私が感じてるのは、それをやっぱり学校の方で続けていっていただく。先生方お代わりになる場合もあるんですけれども、やっぱりそういうふうなことによって生徒たちが、喜び、要するに作ったものが売れる、その先にはですね、買ってくれる人とキャッチボールができるというふうなことの大切さっていうのを、やっぱり実践でですね、マルシェを通じたりして、やっていって経験をしてもらうということが、今副委員長が言われたように、そういう人たちが卒業して、魅力ある農業に取り組んでみたいというふうな気持ちになるということが、私たちも含めて、周りの農業に対して見てる人たちの、やるべき姿も１つ入ってるのかなというふうに考えたので、諸手を挙げて後押しするとかっていう話ではないんですが、ついついうれしくなってお話をさせていただきました。

それともう１つは、南委員さんがおっしゃってた、水がこないという問題で、実はあれね、私のところ、ストックマネジメント事業、ストマネて言ってるんですけど、あれでたまたま採択を受けて、地元負担 7.5%なんですよ。フルスペックの見直しをかけて４億 5,000 万ぐらいで計画を乗って令和９年から８年くらい、生産まで８年ぐらいかかるんですけど、それに一応たまたま土木やった土木屋ですんで、一応管理せよということで８年間、走り抜けできない状態なんですけれども、地元負担金で４億 5,000 万のうちの 7.5%ですから、関係してるところが 100 ヘクタールぐらいある。

その部分の水路、私のところはもうおそらく 40 年から 50 年近くたってまして、やっぱり水門であったり、水路そのものの劣化による漏水等々はいろいろ問題あってですね、すべてを見直してる時点なんですけれども、このストマネ事業はですね、国で継続的にされるのか時限立法みたいな格好なのかちょっと不案内で申しわけないんですけれども、１つの案として、そういうふうな、のっかりっていうのはちょっと軽すぎるんですけども、手法の１つとして取り組まれるというふうな考え方も忘れずにされると、地元の負担金が少なくなる。地元の負担金が少なくなるっていうのは、申し上げて失礼なんすけど、私自身もそうなんですけど、非常にありがたい。

それよりも問題は、ちょっと話はずれたんですけど、実は今私に田んぼを売ってあげるから田んぼ作ってくれという、今現状で田んぼを買って、田んぼしましょうっていう人は、私今 10 町やってますけども、そんなに世間で多くない。販売価格もあって改修に対する費用が何十万でかかりますので、もうそれが決定するまで、売買してしまいたいんだっていう人も中にはいてくれるんです、地域の中で。その人達を投げやっておくわけにもいかないので、今の事業の中で、取り組める内容の説明と、もしそういうふうな何か計画を出されるようであれば、その担当者というか関係者として、話、相談に乗るということも考えておく必要もあるとは思ってるんですけど、南さんがおっしゃった話については、私ど

もはたまたま、ストマネで採択をいただいて、今後８年間でやっていくというふうな流れをとってますので、これ非常にありがたいなという２点だけ、ちょっとお話を聞いていただければと思いますので、すいません。

（野中章久委員長）

ありがとうございます。どこの省の事業なんですかね。所管の省庁どこなのかという。

（「農林水産省」という声あり）

（野中章久委員長）

すいません元農水省なのに。

それ聞いたことねえな。新しいんですね。そうなんですね。

っていう形で、だからそういうのを狙っていこうっていうのを知恵寄せ集めていくと、市の水準の計画でも結構大きな事業ができるんじゃないかっていうのが、対照表をつくろうよっていう。

お願いします。

（南友照委員）

今、教えていただいた内容は承知してまして。今国の方もこの５年間ぐらいで集中的にお金をつぎ込んで整備していきましょうという、多分重点期間というか、そういう形になってると思うんです。

多分福地さんのようにこうね、誰か地域で音頭をとって、よしやるぞっていう方がいてくれるところは本当に多分一致団結で、すっと話が進むと思うんですけど、先ほどの本当に、もう 70 代 80 代しかいないような、って言ったらちょっと失礼なんですけど、そういう地域で、もう漏水してるとか、もう田んぼもちょっと変形とか、湧き水が湧いてるとか、それを何とかしようってなったときに、やっぱり最初は地域の中で話をしてもらわないと進まない案件なので、前回ちょっと伊賀市さんとお話させてもらったときにもそういう話があって、できたら例えばそういうのも伊賀市さんの方で、この計画の中とかで、もう伊賀市内を順番に、もうスケジュールを立ててもらって、もうこのあたりはこの辺この辺りはこの辺でもう一度新たに補助整備をし直していったらどうだろうみたいな。

それは例えば、もう圃場の整備は置いといても、例えば簡易的に水路だけの整備とかもありだと思うんです。

例えばもう中山間で本当に山の中だともう重機も入れることもできないようなところもあると思うんですけど、そこは例えばもう一回、用水と排水だけ直すとか、パイプライン化だけするとか、なんかそういうのをもうちょっとこう、本当は地域で話する必要はあると思うんですけど、その音頭を取れる人がどんどんいなくなってるので、そこをもうちょっとこう伊賀市さんの方とか、例えばフジヤマさんのようなそういうコンサルの方に入ってもらうなりして、地域の合意形成を進めていくっていうような流れをここに入れてもらった方が、本当に、多分例えば若い人、僕は水稲中心なんで水田の話でいくと、若い人がやりますって来ても、猪出てくる、田んぼは水湧いてる、水入れたくても水入れら

れない、勝手に入れたら怒られる。この状況では、水稲ではもう間違いなく成り立たない。

なので、まずはその基盤をもう１回整備し直してもらう必要は、僕はそこからじゃないかなあと思うんです。

基盤整備はその話と、もう１個この個別施策のところでいろいろ、集落営農への支援とか小規模農家への支援、高齢農業者への支援とか、いろいろこう５項目ぐらい分けてくれてあるんですけど。例えばここで、30 ヘクぐらい個人でやってる農家の方はこれどこに該当するのかなと。例えば集落営農さん 50 ヘクやってる集落営農さんは支援あるけども、50 ヘク個人でやってる農家さんは支援ないのって。なんかそういう、ちょっとここは不公平感があるんじゃないのかなと。

もちろん僕も最初に小規模の方、もっと支援して欲しいっていうことはここで発言はさせてもらったんですけど、やっぱり、個人でも結構な面積やられてる方は一定数おられるんで、そこへの支援っていうのは僕、確実に明記するべきだと思うんですけど。

いかがですかね。

(野中章久委員長)

それはちょっと後で、事務局及びフジヤマさんにご意見いただこうと思うんですが、ちょっと委員長としては打ち合わせの中の話でいくと、担い手への農地集積みたいなところに集約されてるのかなあという感じはしますね。

大規模農家だと、必要な経営的な、なんていうか、要素っていうかな、投入の要素で、機械とかありますけど。機械とか資金だとこの金融の話になるので、政策金融公庫とかの話、マターになってくるとちょっと役場から遠くなるのかなっていう印象ありますけど、その辺も含めて後でちょっと、事務局及びフジヤマさんからご意見いただければ、大事な話なのでいただきたいなと思います。

ありがとうございます。

いかがですか。お願いします。

(川瀬成清委員)

すいません。４章に今後また入ってくるのか、５章以降に入れられるかちょっとわからないんですけども、この地域計画という言葉が一切入ってないように思います。

朝からずっとこれを見てたんですけども、新規就農者の支援とか、新規就農者の補助金もらうにしても地域計画が必要。で生産基盤とかっていうふうな部分についても、地域は必ず必要になってくるのかなと思うんで、やはり地域計画、まだ伊賀市 100%できてないので、早急に 100%にするっていうのと、またその地域計画見直して、今後ずっと見直していくっていうのを、やはりこの計画の中には必要なのかなと。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。これあんまり打ち合わせでは考えなかったね。いや逆に言うと、地域計画に付随して、特に抜けてるよっていう話ではなく、もう、裏側があれば。

例えば、制度的に今地域計画作るのがないと何て言うかな、農水の交付金とのバンドル

がされてるので取れないじゃんって話になるけれども、そう、さっきのご指摘のように、地域でどうするの農村、農地をみたいなところが、やっぱりほ場整備なんかも含めて、基礎になるけども、そこはやっぱり担保するべきだよねっていう意見でもあるのかなあと思ったんですけど。

さっきちょっとコメントしませんでしたけど、確かに集落への支援とかっていうところはあるんですけど、地域で水田どう管理しようかみたいな活動に対する働きかけば、確かにちょっとあんまり書いてないなっていうところがあったんですけれども。

その辺どうでしょう。それも含めての地域計画。

（川瀬成清委員）

そうです。それも含めての地域計画。

（野中章久委員長）

はい、わかりました。

他にいかがでしょうか。

これも後でちょっと事務局及びフジヤマさんからご意見、そのリプライをお願いしたいと思います。

はいどうぞ。

（吉福農林振興課長）

まず地域計画のお話についてはですね、確かに今委員おっしゃったように、今現在３月末では 99 の地域計画ができるかなというふうに思っていて、あと１地区が書類はでてきておりますので、来年度早々には 100 地区到達しようかなというところではございますけれども、まだできてない地域もたくさんあるという現実もございます。

当然、地域によって様々な事情は抱えているかと思いますけれども、市としても地域計画の推進というのは必要なことかなあというふうに思ってますので、今後も進めて参りますし、先ほど事業との絡みのお話もありましたけども、例えば先日認定農業者の会議の中でですね、ちょっと別の大学の先生もおっしゃってたんですけども、例えば獣害を昨今どういうところを守っていくかというような位置付けについてもですね、例えば地域計画で 10 年後の担い手を通じて守っていくようなエリアもしっかり囲っていくというような使い方にもですね、地域計画を利用してですね、計画立てていくというようなお話も講演の中でもございましたし、上手に地域の中のあるべき姿を模索していく中では、地域計画の策定については市の方も進めていくことになってこようかなというふうに思いますので、この計画の中にもですね、一定そういうものも位置付けていく必要はあるのかなあというふうに思います。

（野中章久委員長）

お願いします。

（村山邦彦委員）

すいません、ちょっと補足で、またさっきの人材育成関係のことでちょっと２点あって。

１つさっき森下さんがおっしゃられてた、何てのかな、ちゃんと根性出せよみたいな所めっちゃわかるんですけど。実際僕、もう今まで 20 人ぐらい社員を取ってきたけど、世代を経てももうそれどうにもならなくなってるのもすごく実感してて、何か仕組みの中に置いてあげないと本当に動けない人が、一般になってきてる気がするんですよ。

そこがやっぱなんか経営っていうか、チームにしないと、１人の人が昔の 70 代のおじちゃんみたいにやるモデルを育てようということにはすごい無理がある気がしていて。だから何か法人とか集落営農とかっていうのが、やっぱりちょっと現代版にアップデートされないとまちを出た人が入ってこれないみたいなことはもう、起こると思うんですよね。残念なんですけど。

なので、ちょっと思うのは、新規就農の人のモデルは１つも１つあれなんですけど、そこを少し意識しといた上で、やっぱりもう１つ必要だなと思うのは、やっぱりその、農業者自身の経営の学びの場というか、お互いの交流の場みたいなのがもうちょっとあっていいのかなという気はしていて、集まって、誰か人が教えるとかじゃなくて全国からインフルエンサーの人を呼ぶとか、そういう形でみんながお互い顔を知って作戦を考えるような場づくりみたいな、結構有効なんじゃないかなって気がするので、リカレント的な研修みたいなのが何らかの形で入った方がいいんじゃないかなっていう感じがあって、多分その人たちが結局背負っていくので、若い人たちはしょうがない 15 年ぐらいかかるけど、頑張ってみたいなことしかできないんじゃないかなって気はちょっとしました。

（野中章久委員長）

ありがとうございます。ご意見、メモしていただければいい。すごく大事な話で。

お願いします。

（泉川道子委員）

ＳＮＳっていうか、結構愛農の卒業生同士なんかでもそのフェイスブックのコメントのところで、ものすごいダーッていろんな意見交換をしてるんですね。私は農業のことわからないんですけど。

このカメムシにはこういうのが効くよとか、これが来たときはこうやったらいいよ、でもあんたの家はこの辺の地域だから、最低気温がこのぐらいだからこれだよねみたいな話をどんどんどんどん出てきて、サルにはこれが効くよとか、こういう獣害対策したらうちはよかったよみたいな意見交換をすごくＳＮＳ上でしているんですけど。それはある程度そのコミュニティっていうか、顔と顔を見て知ってる人同士だから利害関係なしにできることなのかなとも思ったりもしてて。

ちょっと今村山さんの話聞きながら思ったのが、例えば日曜マルシェをいろんな地域でやったときに、その農産物を米や野菜を持ってきた人たちがそれを売るんだけど、そのあと、ちょっと交流したりとか、経営についての意見交換をしたりとか、なんかそういうところからなんか始まっていったりするのかなみたいな。だから、市町で行政も一緒になって、輪番にいろんな地域をマルチで回っていきながら、農業指導員の方も一緒になって、

経営のことも一緒に考えていく。その農作物をどう作るかとか、どう技術的に作っていくというものができるかだけじゃなくて、どう経営するかっていうことまで含めて相談に乗り合えるような、アカデミーの出張アカデミーじゃないんですけど、場所１個決めてそこにみんな集めるのもいいけど、それぞれ出かけていって、いろんなところでやっていくっていうのもちょっと面白そうだなって思ったし、島ケ原のアンケート見ると、島ケ原の方々がちょっと少なかったりするんですよね。

だからそういうところから、青山もちょっと少なかったりするんですけど、そういうところから始めていくとかそんなのもあるのかなと思ったりして聞いてました。

すいません。

（野中章久委員長）

ありがとうございます。具体的ないろんなね、事業の展開っていうのが、このさらに実施する中では計画、全部が全部入れるっていうわけにもいかないかもしれませんけどね。

ただそういう場として、ちゃんとそういうのを支えていくっていうのは、謳うことは重要なのかなという感じですよ。

そういうご意見だと。

いかがでしょうか。

僕思ったんですけど、今の議論とはちょっと距離が出るんですが、農業アカデミーってこれに対する期待が非常に大きいということが、今日すごい反応としてあったというふうに思うんですよね。打ち合わせのときの想定よりも大分あったっていうふうに言っていいんじゃないかなと思うんですけど。

同時にね、農村の振興策の方にあって、空き家の活用とかあるんですけど、移住アカデミーやってもいいなってちょっと思いました。それは予算的にどうするのかとか、誰が誰を教えるんだとか。例えば野中お前、ちょっと経験あるからやれって言われても、いや僕は成功したんだけど、僕以外の人は別の場所だ、これじゃ成功しないよなみたいのがあったりする可能性があるので、必ずしもなんていうかな、スカっとアカデミーアカデミーした内容にはなりえないかもしれないけど、少なくとも例えばそういう集落営農の人が来てくれると嬉しいなと思ってる集落の人たちが母体になるとかっていうのも、結構いいのかなっていう感じがします。

逆に言うと、津市で多いのは空き家があるからって買っちゃうんですけど、何かどっかの企業の保養所として買いましたとか、なんか別荘ですとか、ゴルフ場にまわるのに便利だから買いましたって人が結構いて、いやそれじゃねえんだよなっていうのがちょっとあったりするんですけどね。だからそういうのもあっていいのかなって思ったというとこです。

お願いします。

（松裏充彦委員）

村山委員もおっしゃってたように、私もその農業ビジネスだと思って、ビジネスという

か経営をきちんと考えないとだめだっていうのは、強く共感できるところであって。

今この施策体系のところにある新規就農者の育成確保のところに農業アカデミーの開講と書いてあるのを、私も学びたいなと思うので、新規でなくても、っては思いますね。

もう全員が学ばないと多分、無理だなとは思いますので、そこをちょっと改訂していただければと思います。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。一方でね、普及機関もあるし、大学もあるわけですからあれですけどね。お願いします。

(前川良文委員)

先ほどの話なんですけども、この間、農業やりたい、伊賀に来たい、そしてそこで県外の方だったんですけども、２人でやりたいっていう方がおみえだったんですが、それは農業を専門的にやる、その生産活動をやる人材、あとはマネージメントができる、経営能力がある、経理関係の方と２人で、農業新規で、そういう方がお見えになるので、先ほどのアカデミーも、やはり新規でもなくても、誰でもが受けられるね、そういうような形をとったほうがいいかなと思います。

ぜひうちのメンバーも受けさせてもらいたいなと、そんな風に思いました。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。そうですよね。

ちょっと言いかけましたけど、普及にしても大学にしても、指導的な機関があって、従来では新しい農薬はこうですよって話で、経営の、僕なんかの領域だと農業経営の普及活動とかね。大学だとそういう関係がありますけれど。

実は、大学の立場からすると今転換点で、従来の農業経営の指導、大学目線での指導だと、資金繰り良くしようよとか、過剰投資しないようにしようぜとか、そういう話なんですけど、もう明らかに今後は、例えば生成ＡＩどうやって使うのとか、或いはそれを使って、データ的に取って、自分が売ってるアイテムの強いところ弱いところを分析しようよみたいな話を適用するにはどうしたらいいかみたいな課題が入ってくると思うんですよね。

そういうところでは、実は大学とかそれをやりますよっていう業者も結構来てるとは思うんですけど、実は彼らとか我々だけじゃできなくて、現場がどうするかっていうところ。例えばね、データをどうやってとるかみたいのが実は命綱ね。こんなんできますよって何億円も払ってやった結果そのデータ取れないっすねっていうのが大体落としどころなんで。今はそうじゃなくて、このデータはここまでだったら取れるからこれどうにか分析できねえかみたいなものを、開発の方とキャッチボールしながら作るっていうのが、現状の課題でまだどこもできてないんですよ。

だから、そういう話でいけば新規就農者だけではなくて、地域の担い手の皆さんのね、新しいまたニーズは様々ですから、自動化したいんだとかいうのもあればさっき言った

ように、データをもっと深く掘りたいんだっていう方もいらっしゃいますから、そういうところに、必要な人と結びつく場としてね、必要な機関と結びつく場として必要だろうというのは私なんかも思うとこだし、多分皆さんも同じような感じじゃないかなと。

しかもその受講者同士の交流で、だって現場が一番知ってるわけですからね、命かかってますから、ここがこれがよかったんだよとかっていうのも、また相乗効果で、大きくなるので、そういうところもあったほうがいいという意見じゃないかなと思います。

でね、意外とね、参入そういうところの仕事もね、参入障壁高いんですよね。農家さんが、反応してくれないとその仕事できないし、例えば僕と、実はちょっとサイドプロジェクトで、さっきの玄米経済みたいな話を延長で、あれサブスクにすればいいんじゃないのっていう話があって、米騒動で皆白米買えなかったから、どうやら、玄米で手配する方向に動いてる気配があって、ていうのは、コイン精米機増えてるらしいんですよ、都市部で。だから玄米で買ってるやつ増えてんじゃないかなって話でいくと、実は商機、ビジネスチャンスとしては、白米で、直売で売るよりも玄米で供給するっていう方が、しかも例えばサブスクでね、うちと供給すれば年間 30 キロあげますよ、渡しますよとかっていうのが、有効なんじゃないのっていうことで、何とかその仕組みなんかは別にそんなに難しいことではないので、っていうふうにやろうとしても誰も賛同しないので、できないんですよね。

だから、逆にそういうの、いろんな試してみようよって場があれば、ちょっと僕たちこういうこと考えて、これ実は結構農家さんの助けにもなって実はそれ地場産業になるんじゃないですかみたいなアイデアが寄ってくるかもしれないっすよねっていうのは思います。すいません、僕の意見が長くなっちゃったけど、貴重なご意見だと思います。

統一した印象だと思いますよね。新規就農だけに限るなよっていう、こういうアカデミーみたいなねっていうのが、はい。理解だと思います。

いかがでしょう。これ以外の話。まだ言い足りないっていうところがあれば、他の要素でも構いません。

はい、お願いします。

(南友照委員)

先ほどの 37 ページの基本施策のところなんですけど。いろいろな組織、個人も含め支援という形で、施策の内容、これからまた協議されるのかなと思うんですが。

これ一応金銭的な補助とかそういう、リースであったりとか、機械的なこと、いろいろ書いてるんですけど、ここにやっぱり、その組織、もしくは個人の人、小規模農家の人も含めて、10 年 20 年、やっぱり農業やってもらう必要があると思うんで、僕もさっき言わせてもらったその事業継承っていう部分もちょっと盛り込んでもいいのかなあと。

そこの話の持って行き方を、ここにちょっと、何かどっかで支援が受けれますみたいな、なんかそういう内容が入っててもいいのかなというふうに今少し思いました。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。事業継承もそうですけど水田の維持のための新しい手当といいますかね。例えば、もう時間もあれですからちょっとこう、多少研究してるものとしてコメントしたいところもあるんですけど、伊賀市中山間多いんで、実はね、例えば収穫時期もそれぞれ少しばらけると思うんですよ。刈り上がっていくようにね、上に向かってね。そうするとね、ファームサービス、ヨーロッパとかイギリスなんかもそうなんですけどファームサービスが多くて、ファームサービス何って言うとね、コンバイン屋なんですよ。コンバインは農家が結構持ってなくて、電話して何月何日にうちの米刈ってくれっつって電話して、刈るんですよ。そうするとコンバイン買わなくていいじゃないすか。その分お金取られますけど、往って来いで関係すると中規模の農家だとね、ファームサービス利用した方がプラスになるんですよね。

で、アメリカなんか逆に言うと、どでかいほ場で、飛行機で種まいてとうもろこし作ってますけど、あれもコンバイン屋が刈るんですよ。あれ、アメリカもあの広大なコーンベルトっていうか、真ん中あたりの農地っていうか州、南から刈っていくんですよ。コンバイン 100 台とかの編成の人たちがガーッて。働いてる人すげえ家にいなくて大変だろうなと思うんですけど。船乗りみたいな感覚なんですかね。こうやって刈っていくんですよ。当然横１列ってか、もうこういう矢印みたいなってガーッと刈ってっちゃうんですけどね。

だから、そういう、その時間差がある地域のはずなので、経営継承の手当もそうですけど、もう無理だと、家の中ではっていうふうになったらこのファームサービスを提供すればっていう形で行くっていうことも作戦として考えるべきなのかなっていう、ある程度の規模があれば、ペイしますからね。経済活動として、はい。と思います。

そういうのを含めてのだと思いましたので、僕の意見も乗っからせていただきます。

いかがですか、もう後、大体議論出尽くしましたか。

大丈夫でしょうか。次、事務局にもコメントいただけますかね。

（吉福農林振興課長）

先ほど南委員の方から、例えば対象としてですね、個人で大規模にしている人の視点がないのかというようなお話もいただきましたし、今おっしゃっていただいたように多様な担い手の育成・確保の中でですね、いわゆる事業継承というような視点を入れてはどうかというようなご意見を頂戴したかなと思います。

その他、たくさん今の農業アカデミーに関しましては、様々な委員さんのお立場からですね、お考えもお聞かせ願ったかなというふうに思っております。

この本日、今日お示しさせていただいたですね、この３章、４章の部分につきましてはですね、まだまだ我々の中でもですね、書き足らない部分もあったりとか、考え方を一定整理していかなければならない部分も多々あるのかなというふうに思っておりまして、先ほどまだ３月にあった会議の意見等々もすべてが踏まえた上で施策を考えてるわけではございませんので、これから、一応次の会議といたしましては５月ぐらいの会議を予定

しておりますけども、それに向けて中身についても本日の意見等々も踏まえましてですね、精査のほうを図って参って、改めてまた意見の方も聴取させていただきたいなというふうに思ってますので、また引き続きよろしくお願いしたいと思っております。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。大分時間も押して、実は議題もあと１個ありますよね、タウンミーティングの件で、これは事務局からの提案ということになりますか。

(大谷農林振興課計画係員)

すいません、失礼いたします。続きまして資料④番をご覧ください。

令和８年１月 16 日に開催いたしました第３回委員会において、市民の皆様や農業関係者の方などと中間案について意見交換を行うことを目的として開催するタウンミーティングの実施についてご協議いただいたところです。

その際に、開催日時を令和８年７月４日土曜日の午後１時 30 分から午後３時 30 分とご案内をさせていただきましたが、令和８年７月 11 日の土曜日、午後２時 30 分から４時 30 分に変更させていただきたいと存じます。

変更の理由は、当該タウンミーティングに稲森伊賀市長が出席することとなりましたが、稲森市長の公務の都合により、開催日時を変更するものです。

開催日時以外の変更といたしましては、６．当日の流れ（予定）において、開会の挨拶を稲森市長からとしたこと、伊賀市夢のある農業振興計画の策定に係る経緯やこれまでの議論の経過について、野中委員長からご発言をいただくこと、ワークショップ形式におけるグループ分けを７としていたところ、５から７としたこと、グループ発表における時間を３分としていたところ、グループ数の変更により３分から４分としたこと、そして裏面、参加募集人数につきましては、人数を 40 人程度から 50 人までとしたこと、参加申込者多数の場合は、抽選から先着順としたこと、10 番、応募締め切りにつきまして、開催日の変更に伴い、参加者の応募締切日を令和８年６月 22 日月曜日から令和８年６月 26 日金曜日午後５時までとしたこと、以上の７点でございます。

参加対象者や開催場所については変更ございません。

当該実施概要の案について、委員の皆様からご意見を頂戴したいと存じます。

また、冒頭に委員長からお話ありましたが、第３回の委員会においてタウンミーティングの実施に際して、委員の皆様の中からファシリテーターの選出をお願いさせていただいたところです。現時点でファシリテーター就任のお申し出等はいただいていないところでございますので、改めてお願いしたいと存じます。

説明は以上です。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。今提案ありましたが、日にちが違ったですよね。はい７月 11 日。よろしいでしょうか。この点ご承認いただけるものとして、よろしいかってのはちょっと確認させていただきたいんですけど、委員の皆様、異議なしということでよろしいで

しょうか。

（発言無し）

（野中章久委員長）

あとですね、ぜひファシリテーターですね、最初に説明しましたように、なんかファシリテーターって僕自身もなんかこういう仕事をしてると、よくなんかいろんな仕事を頼まれるんですけど、５年ぐらい前に野中さんファシリテーターやってって言われたときにですね、もう勘弁してくれみたいなこともあったんですけど、やってみた結果、座長みたいな話だったんですけど、参加いただければもうほぼそれで任務としては完了するんじゃないかなっていうこと。

ただし、黙ってるというわけにはもちろん行きませんけれども、少人数ですし市内の方々ですし、ぜひそのぐらいのものだというご理解で、ご協力を賜りたいと思います。

僕と副委員長は参加しますが、僕なんか特に何か挨拶するとか全体統括みたいな話で、ファシリテーターという任務ではありませんので、何グループできるかって問題もあるんですけれども、ぜひちょっと、事務局からこういうふうにお願いせよという話でいくと、委員の皆様には、参加前提でお願いしたいということですので、ご了解いただければと思います。

今日ちょっと大分時間も経っちゃったんで、事務局あれですか人選の方は、また事務局から個別にお願いということで。

はい、お願いします。

（藤森農林振興課主幹（計画担当））

失礼します。こちらから人選っていうわけではないので、もしご参加というかですね、ご承認いただける方いらっしゃればですね、事務局の方にまたご連絡いただけたらと思います。

先ほど委員長の方からもご案内ありました通り、ファシリテーターの役割ということのところなんですけれども、より具体的に言うとですね、各グループの方に１人ずつ、委員さんが入っていただきまして、議論の中のですね、グループの中の議論を活発にするような形で何かご発言等々いただければありがたいなと、そういう役割を期待させていただいてるところでございます。

（野中章久委員長）

ありがとうございます。なんか委員長の職務って、いまいちはっきりしないですが、ここはちょっと委員長の権限でですね、参加できないという場合に事務局に参加できないという旨をお伝えいただけるということで、お願いできないかなと思います。

そういうことで、はい。委員長権限でそういうふうにしましたので、よろしくお願いします。よろしいでしょうか。

じゃ、時間も４時半に近づいてきましたので４番目っていうか、最後でその他、もしございましたら。

委員の皆様から、なにかありますか。

（発言無し）

（野中章久委員長）

ないようでしたら、これで、事務局にお返しするということですけども、緊急動議的なものがもしなければ、はい。

じゃあこれで事務局にお返しするということでよろしいですかね。

（吉福農林振興課長）

それでは委員の皆様、活発な議論ありがとうございました。

次回は５月の末の方でですね、会議の方をまた予定しておりますので、またお忙しい中ご出席の方賜りますよう、よろしくお願いします。

本日はどうもありがとうございました。

（午後４時23分　閉会）